Soma x Soma

審判の時

それは20世紀が終わりを迎えつつある1999年7月の事だった。
かの有名なノストラダムスの大予言のイメージからか。
核戦争やテロ等の人災、隕石の落下や大地震等の災害、はたまた2000年問題に起因するコンピューターの反乱など。
世界の滅亡を題材にしたテレビ番組の特番やフィクションが多く作られた。
そんな時代の最先端を生きる多感な子供達は、今まさに世界の滅亡に関わる何かが行われているのでは無いかと想像を巡らせ世紀末ムードに浸っていた。
子供達を守る立場にある大人達は、そんな事はあるはず無いと根拠の無い言葉を並び立て一笑に付した。
結論から言うとそんな大人達の言葉を証明するように、世界が滅亡する事無く新世紀を迎えられたのは事実だ。
だが、決して何事も無く平穏無事に時が過ぎ去ったわけでは無かった。
そこには当時の子供達が想像した以上の物語があり、この世界は人知れず危機にされされていたのだ。
それはブラフマン…、始祖のアルカナである『愚者』を名乗る男によって立案された神をも恐れぬ実験。
タロットを神に至る教典に見立て、アルカナの暗示によって少年・少女達に異能力を与え、互いの持つカードを賭けて戦わせる。
そして、全てのカードを手にした者が終極のアルカナ『世界』…つまりは神に至る事を証明するというものだった。
ブラフマンの実験は神戸の街にある県立のとある高校を舞台にし、巨大な権力の後ろ盾を得て犠牲を払いながらも計画通り進行する。
何故、そのような実験が支持され実行される事になったのか。
それは未来への不安から子供を守ろうとする大人達の優しさ故であったが、そのエゴが子供達を犠牲にし世界を危機に晒す事になるとは皮肉なものである。
そして、7月の終わり。
世界の命運を左右する戦いも終局を迎えようとしていた。

1999年7月31日、土曜日。
それは心がざわめくような夜だった。
闇に覆われた六甲山から湿り気を帯びた冷たい風が吹き抜け、美しくも寂しさを感じさせる数多の光を灯す神戸の街に雷雲を運んで行く。
稲光を放つ黒い雲は意思を持つかのように蠢き、低く唸るような雷鳴を轟かせながら、人々の暮らす街の空を徐々に浸食する。
それまで憎たらしいばかりに鳴いていた夏の虫達も息を潜め、周囲は昏く重い静寂に包まれて

いた。
　まるで地響きのような音と共に空を引き裂く稲妻によって、六甲山の麓に聳える洋風の趣きをした校舎が影絵となって浮かび上がる。
　それは実験の舞台として用意された県立高校であり、ロンドン塔と呼ばれる塔屋や銃眼に見立てた装飾の施された歴史ある校舎が特徴であった。
　再び大地を震わせながら稲光が走ると、校舎の屋上で対峙する四人の少年少女のシルエットが浮かび上がる。
　互いに敵意をむき出しにした強い視線を送りながら向き合う少年二人は、特徴的なカーキ色のズボンにワイシャツと言うこの学校の制服を着用している。
　一人は身長170cm弱の細身の体型で、額に大きな傷を持った髪の長い少年。
　一人は身長160cm程の小柄な体型で、中性的な顔立ちをした髪の短い少年だ。
　二人の少年の傍らには、それぞれパートナーとなる少女が控えている。
　二人の少女はそれぞれ150cm程で似たような体格であるが、服装や印象が大きく異なっている。
　髪が短い少年のパートナーであるショートヘアーの少女はこの学校の制服であるセーラー服を着用している。
　それに対して。
　髪が長い少年の少年のパートナーである長い銀髪をツインテールにした少女は、ゴスロリと呼ばれる黒いフリルを付いたドレスを優雅に着こなしていた。
　また、それぞれのパートナーとの立ち位置も異なっている。
　ゴスロリ少女が髪の長い少年へと寄り添うのに対比し、セーラー服の少女は髪の短い少年と少し距離を置いて佇んでいた。
　重さを増して行く雲の切れ目から朧げに輝く月を仰ぎ、ゴスロリ少女は意味深な嘲笑を浮かべる。
　一方でセーラー服の少女は大きな瞳一杯に涙を浮かべ、対峙している髪の長い少年を上目遣いで見つめた。
「ねぇ…。どうしても…。どうしても、戦わなきゃ駄目なの…？」
　セーラー服の少女が沈黙を破る。
「ああ…。例えお前を敵にしようとも、俺は負けるわけにはいかないんだ…」
　髪の長い少年はゴスロリ姿の少女の手を強く握る。
　その小さな手は冷たくて生気を感じさせず、離せば今にも消えてしまいそうだった。
「こいつを運命の呪縛から救う為に…！」
「ふふっ…、その気持ちだけでわたくしは満足ですわ…」
　その儚げな微笑みに少年はより一層決意を固める。
「そんな悲しい事言うなよ…、馬鹿…！！」
　稲光の作り出すシルエットの中。
　髪の長い少年とドレス姿の少女は抱き合いながら唇を重ねた。

　次の瞬間、少年の長い前髪から覗く傷から強い光が放たれ、二人の持つ雰囲気が何処までも、何処までも拡大して行く。
　校舎、神戸の街、関西全域、日本、アジア極東、地球。
　それはありとあらゆる物を包み込み、世界の全てが二人だけのものとなった時、少年の眼前にNo.18『月』と書かれたカードが出現した。
「お前にそんな悲しい事を言わせるような下らない運命なんて…！　俺が…、俺が絶対に変えてやるっ…！！」
　長髪の少年がカードを回転させながら掴み取ると、それは鋭い光を宿した日本刀へと変化する。
　繋がれた手と手。
　重なる身体。
　そして、音を立てながら絡め合う舌と舌。
　どんなに望んでも適う事の無かった愛する少年との男女の交わり。
　それを見たセーラー服の少女は、長髪の少年と自分との間に決定的な距離を感じ、思わず声を漏らしながら止めどなく涙を零す。
　しかし、今はそんな個人の感情に流されている時では無かった。
　そんな彼女の肩を叩きながら、目を伏せて頷く短髪の少年。
「解ってる…、わたしがやらなければいけない事は解ってるっ…！　でも、あなたとはキスはしたく無い…！　出来ないのっ…！！」
　少女の拒絶の言葉に少年は優しく微笑む。
「ああ…、ボクはそんな事求めて無いよ…。君が側にいてくれるだけで力になるから…」
　声変わり前と言った印象の少年の囁く声は、まるで細波のようにゆっくりとしていて、少女は落ち着きを取り戻す。
「こんな時に我が侭言って…、ごめんね…」
　少年は恥ずかしそうに俯く。
「良いんだ…。何時かきっと、一度で良い…。たった一度、ボクに向かって笑ってくれれば…。ボクはそれだけで生きて行けるから…！！」
　短髪の少年は強く拳を握り込み、小柄な体からは想像も付かない殺気を放つ。
　それは相対する長髪の少年を呪い殺さんとばかりに、不可視ながら確かに存在する領域が空間を覆って行く。
　そして、少年から発せられた何かは、No.20『審判』のカードとして具現化する。
　少年の手の中で両刃の剣へと変化したカードは、不浄なる者への純然たる殺意、裁きの象徴であった。
「だからボクはこの手で未来を掴み取るっ…！！」
　その殺意は対峙する長髪の少年とゴスロリ少女の持つ世界観を切り裂き、何人も犯す事が出来ない、何人をも圧倒するような存在感を放っていた。
　ポツリ。

　またポツリと大粒の雨が屋上の床面を叩く。
　よりいっそう湿った臭いが漂ったかと思うと、瞬く間に大きな音を立てて冷たい雨が降りしきる。
「神に至り運命を破壊し創り変えるのはこの俺だ…！！」
「罪深きあなたにそれが出来るものかっ…！　全ての罪を裁く神となるのはこのボクだっ…！！」
　それを合図にし互いに駆け寄る二人の少年。
　交差する刃と刃。
　稲光によって影を落とすロンドン塔の上では、スーツにサングラス姿の男が戦いの行末を傍観していた。
　その身体から音も無く発せられる力は、重くのしかかるような雨を弾き飛ばしていた。
　まるでこの世界の全てを拒絶するかのように。
「ブラフマン…、全ての創造主であり、愛すべき人の成れの果て…。
　ふふふっ…、真に裁かれるべきは人々の運命を縛り付けるわたくし達をおいて他なりませんわね…。
　わたくし達に与えられし罰は永劫であるものの後悔はありません事よ、あの方と幾度と無く刹那の逢瀬を交わす事が出来たのですから…。
　そして、何時かはあの方がわたくしを解放して頂けると信じていますから…。
　その為ならば、喜んで罪を重ねますわ…」

1995年1月17日、火曜日。
支えを失い横倒しになった高速道路の高架陸橋や、自らの重みに耐えられず押し潰されたコンクリート製建築物の歪な姿を西日が真っ赤に照らす。
神戸の街の至る所で焼け落ちた木造住宅から出る黒い煙が立ち上がっていた。
大きな音を立てながら空に浮かぶ無数の報道ヘリは、その様子をテレビの向こう側に住まう人々に届ける。
信じ難い光景ではあるが、それは紛れも無い現実だった。
どれだけ時が経とうとも、決して風化させてはならない現実なのである。
阪神淡路大震災。
午前5時46分52秒。
史上初の深度7を記録した地震の発生と同時に街の至る所で火災が発生した。
逃げる事が適わずに炎に焼かれたり、倒壊した建物や凶器と化した家具に押し潰され、多くの人が命を落とした。
日が暮れようとする今も消火や救助活動は追い付かず、瓦礫の下で助けを待ち続けている人も多くいる。
病院も深刻な被害を受けている為、怪我の治療を受ける事が出来ない人も多くいる。
住む場所を無くした人も、大切な人を失った人も多くいるのだ。
被災した人達を支えるだけの物資は確保されておらず、十分な食事をとる事も出来なくなるだろう。
満足に用も足す事の出来ない不衛生でプライベートも無い避難所で、すし詰め状態になりながら冬の寒さや余震に耐える事になるだろう。
そして、まだこれからも多くの人の命が尽きて行く事になるだろう。
何時終わるとも知れない先の見えない日々への不安は、過酷な現実に生きる人の心を容赦なく傷つける。
だが、それでもまだ生きている、これからも生き続けなければならないのだ。
どれだけの傷を抱えることになろうとも。
どれだけ辛くて惨めな思いをしようとも。
どれだけ身勝手な本能を曝け出そうとも。
生きる事とは戦いであると、そこにいる誰もが悟らざるを得なかった。

神戸の中心である三宮駅から北に向かって坂を上ると、趣きのある洋館が建ち並ぶ場所がある。
かつては外国人居留地として栄えたそこは北野異人館と呼ばれ、現在では神戸を代表する人気の観光地となっていた。
しかし、何時もの賑わいも今は無い。

震災の混沌の中でもひっそりと静まり返り、そこだけが現実から隔たれた異世界であるかのような雰囲気を醸し出していた。
そんな北野の丘の上に風見鶏の館と呼ばれる煉瓦造りの洋館がある。
壁面には深いひび割れが発生し煙突が落下していたものの、トレードマークでもある尖塔の風見鶏は夕闇の中でシルエットとなって浮かび上がっていた。
所々ガラスの割れた窓からは白熱灯の柔らかい明かりが零れ、中で人が活動している事を伺い知る事が出来る。
ユーゲント・シュティール（青春様式）と呼ばれる19世紀末の意匠が施された建物の内部では、揺れの大きさを物語るように家具が滅茶苦茶に倒れていた。
その二階の北西側にある客用寝室のベッドでは、額に包帯の巻かれた少年が横たわっている。
中学生ぐらいだろう。
二次性長を迎え始めたばかりの身体は、伸びて行く身長のわりに手足が細く、未成熟で頼りない印象を受ける。
「い、行かないでくれ…」
少年は意識を失いながらも何かに魘されて、汗でべったりと貼り付いた長い髪の間から、歳に見合わない険しい表情を覗かせていた。
そんな彼を心配そうに見つめる小さな後ろ姿があった。
少年より年下の小学校高学年程の小柄な少女で、少し青みを帯びたショートヘアーに、小動物の動物の耳を思わせる黄色いリボンが特徴的だった。
「お願いだから…、独り…、置いて行かないでくれ…」
苦悶する少年の頬に涙が零れる。
居ても立っても居られなくなった少女は思わず少年の手を握りしめる。
その大きく澄んだ瞳が涙で潤み、みるみる大粒の涙が溢れこぼれ落ちる。
「お兄ちゃんは独りじゃないよ…。わたしがいてあげるから…。だから、泣かないで…。もう、苦しまないで…」
そして、嗚咽を堪えながら途切れ途切れの言葉を放ち、彼の悲しみが少しでも晴れるように祈り続けた。
それがどれだけ続いただろうか。
「…そ、ぁ…」
少年は言葉にならない何かを呟きながら少女の手を握りしめる。
その表情は憑物が堕ちたかのように落ち着いて、静かな寝息を立てるようになった。
少女はほっとした瞬間に急に疲れが吹き出てそのまま眠りに落ちそうになるが、汗に塗れた少年の顔を見ると自分の頬を叩いて奮起する。
少年の身体をタオルで拭いたり、発熱した額を水で冷やしたりと懸命に看病を続けた。
彼女自身も被災者であり、心に傷を負った小さな子供である。
震災発生時には恐怖心から泣き叫び、生まれ育った街の様子を見て大人達以上のショックを受けていた。

　学校の友達や親しい人達の安否も解らず、住んでいる家も大きく壊れ、これから先の日々に不安を隠す事が出来ない。
　だが、彼女はどんなに自分が辛い時でも人の事を思い、人の為に行動し続ける事を止めない。
　やがて出来る事をやり尽くし少年の胸元に体を預けるように寝てしまうが、小鳥達が囀る声で少女は目を覚ます。
「う…、うっ…」
　そして、東の窓から朝日が差し込む中。
　少年は声を漏らしながら、重たい瞼をゆっくりと開いていく。
「ら…ぁ…」
　少年はぼやけた視界の中に少女の姿を見ると、その小さな手を求めて力無く握る。
　少女は少年の細い手を強く握り返すと、彼が意識を取り戻した事を実感し、その大きな目を見開いて瞳をキラキラと輝かせる。
「よかった、目が覚めたのね！　お父さぁん！！　起きたよぉ！！！」
　やがて室内にスーツの上に白衣を着用した長身の男性が現れた。
　歳はおそらく30代前半だろう。
　サングラスでその表情を隠しているが、人生の全てを知り尽くした老人と、純粋で傷付きやすい少年が同居したような独自な雰囲気を感じさせた。
　その後ろには長身でスタイルの良い侍女が、柔和な微笑みを浮かべて立っている。
「意識が戻って何よりだ」
　サングラスの男性は抑揚を押さえた低い声で言う。
「あ…、なた…、は…?」
　少年は眩しい光に目を細め、一文字ずつ言葉を絞り出すように声を出す。
「私は精神科医であり、脳神経外科医でもある旭陽昇だ。
　街で頭に怪我をして倒れていた君を見つけ自宅に連れ帰って治療したんだ…、震災で病院は機能している状態じゃ無かったしな。
　早速だが身元の確認をしたいので、君の名を教えてくれないか…?」
「ソーマ…。双間創真…。あとは…、駄目だ…。何も思い出せない…」
　少年は頭を抱えて項垂れる。
「うむ…。心因性、または外傷性による逆行性健忘か…。どちらにしてもこの状態では無理もないな…」
「ぎゃっこうせいけんぼうって？」
　少女が男性に上目遣いで聞く。
「平たく言うと記憶喪失と言うものだ」
「そ、そんなぁ…」
　少女はショックを受けたが、悲しみに苦しむ少年の寝顔を思い出し、次の瞬間には意を決したような表情をする。
「いいもんっ！　思い出が無いんだったら、わたしが思い出になってあげるんだから！！

　これから楽しい事沢山一緒にして、お兄ちゃんの心を全部埋めて、悲しい思いなんて絶対させないんだからねっ！！」
「ふっ、我が娘ながら、まっすぐ過ぎて眩しい子だな…」
　男性の口元が僅かに歪む。
「わたし、ソラっ！　旭陽空って言うの！！　よろしくね、ソーマお兄ちゃん！！！」
「そういう事で、創真君。新しい世界にようこそ…！」

新たな一日

1999年7月13日、火曜日。
神戸の街は新しい朝を迎えようとしていた。
北側にある六甲山の稜線をなぞるように暁の光が溢れ、新月の深い闇に包まれた街の全貌をゆっくりと照らし出して行く。
倉庫街のクレーン。
ハーバーランドの観覧車。
キャンドルのようなポートタワー。
蒲鉾のようなオリエントホテル。
埋め立て地へと続くポートピア大橋。
ベイエリアを象徴するランドマークが南の海上にその影を落とす。
湾岸に沿って走る高速道路の高架の北側。
趣きのある西洋式の近代建築と天を突くような現代建築が混在するオフィス街は、早朝の澄んだ空気の中でひっそりと静まり返っている。
西側の中華街では搬入の車が行き交い、仕込みの匂いがあちこちから漂っている。
壊滅的な被害を出した阪神淡路大震災から四年が経過していた。
神戸の街は特色である古今東西の様々な文化を活かしつつ復興し、更なる発展を遂げようとしていた。
商業施設が建ち並ぶ三宮駅の北側。
六甲山の麓に面した丘の上に建つ風見鶏の館も例外では無い。
震災時に破損した壁面や煙突も最新の技術を使って補修され、当時のままの姿を取り戻しただけではなく、より頑強に生まれ変わっていた。
その東側バルコニー。
朝の涼風にあたりながらティーカップ片手に黄昏れる細い人影があった。
足下にはコンバースオールスターのハイカット。
交差させた長い脚にフィットしたカーキ色の学生ズボン。
細い胴に蓮華がデザインされたバックルのついたベルトが巻かれ、法螺貝のペンダントが胸元で光っている。
ハイネックのタンクトップの上から学生服のシャツを羽織っているが、風に煽られ猫科の動物を思わせるしなやかな筋肉が見え隠れしている。
そして、長く伸びた艶やかな黒髪から、不敵に歪む口元と額の傷跡が覗いていた。
双間創真。
阪神淡路大震災の際に記憶を失う程の怪我を負った少年は旭陽家の一員として過ごしながら成長し高校二年生になっていた。
「おはよう、ソーマお兄ちゃん」
創真は鈴が鳴るような声に自分の名を呼ばれて振り返ると、そこには声に相応しい可愛らしい

少女の姿があった。
　子供のように小さな背丈であるが、水玉のパジャマに包まれた肢体は緩やかな曲線を描き、子供でも大人でも無い少女特有の存在感を放っている。
　その小さな胸にはディフォルメされた水色の象の縫いぐるみが抱かれている。
　白いボンボンのついた水玉模様のナイトキャップを被った青みがかったショートヘアーが風になびき、シャンプーと汗の混じった甘い香りを漂わせていた。
　やや丸みを帯びた顔に爛々と輝く大きな瞳は愛玩動物を思わせ、誰もが庇護欲をかき立てざるを得ない。
「おはよう、ソラ」
　創真の透き通るような高い声が少女の名を呼ぶ。
　旭陽空は創真を看病した時の純粋な優しさやをそのままに高校二年生になっていた。
　空は小さくアクビをすると大きな瞳一杯に溜めた涙を擦り取り、ボンボンの付いたスリッパをパタパタ鳴らして創真の隣に寄り添う。
「こんなに早起きするなんて珍しいね」
　上目遣いで創真を見上げる空。
「まぁね、早起きは三文の徳って言うだろ？」
　創真はそんな空に微笑みかけるが、その瞳は何処か遠くを見つめているようだ。
　空は苦しくなった胸を誤摩化すように縫いぐるみを強く抱き締め、ゆっくりと声を絞り出すように言う。
「お兄ちゃんの嘘つき…。ホントはまた変な夢を見て目が覚めたんでしょ…？」
「何でそう思うんだい？」
「魘された後のお兄ちゃんは、いつも寂しそうな目をしているんだもん…」
「ふっ、まったくソラにはかなわないなぁ…」
　そう言ってため息を漏らすように笑う創真の瞳は、澄み切った水面のように空の顔を映し出していた。
　空はたまらなく恥ずかしい気持ちになり、朝焼けの中で頬を赤く染める。
「そうさ、それは何時もの夢。
　その中じゃ僕はちょっと寂しい奴でね、ゴスロリ姿の女の子と一緒に超能力で誰かと戦っているんだ。
　まぁ、ソラやおじさん、他にも知っている奴らや場所が思いもしない形で登場したりするし、如何にも夢って感じの支離滅裂さなんだけどね」
　そう言う創真の戯けた表情の裏側に真剣さを感じる空。
　その気持ちを汲み取ろうと創真の顔を暫く見つめていた空であったが、ハッと何かに気がついてジト目で言う。
「ねぇ、その女の子って…、可愛いの…？」
　空の乙女の感は創真の心を捉えるものを探り当てる。
「まぁ、ソラとはまた違った魅力がある事は確かだね。…ソラを青空に燦々と輝く太陽だとす

ると、彼女は闇夜に浮かぶ月のような子かな」
　創真はニマニマとした笑みを浮かべていた。
　これは嘘偽り無い気持ちに違いないと思ってしまうのも乙女の感だ。
「ソーマお兄ちゃんのスケベ！！　なんか、欲求不満があるから、そんな夢見ちゃうんじゃないの？」
　空は眉間にしわを寄せ、少し怒りながら言う。
「馬鹿だなぁ、ソラは。自分の欲望に忠実に生きてる僕に不満なんてあるわけないだろ」
　創真は腰に手を当てて自信満々に言う。
　その様子がなんだか面白くて空は笑いながら返した。
「馬鹿じゃないもんっ！　それにそんなのいばって言う事じゃ無いよぉ！！」
「それが、僕にとっては誇らしい事なのさ！」
　それも本当の事だと思う空。
　だからこそ創真の気持ちが解らなくて仕方なかった。
　そして、創真は空に微笑みかけると、眼下に広がる神戸の街を遠い目で眺める。
「ただ思うのさ…。どんなに今が幸せで楽しかったとしても、それは目が覚めれば消えてしまう夢なんじゃないか…ってね」
　創真の寂しそうな横顔に息を飲む空。
「夢なんかじゃないよ？」
　今まで過ごして来た日々が夢だと思って欲しくなくて、空は居ても立っても居られず創真の手を握りしめた。
「ね、こうすればわたしを感じるでしょ？」
　創真は空の小さな手をギュッと握りかえす。
「ああ、そうだね」
　空は体温と一緒に創真の優しさが伝わって来るような気がして、幸せな気持ちで満たされる。
「ずっとこうしていたいぐらいだよ」
　創真はその手をやらしく触りだしたので、空は慌てて手を引っ込める。
「スケベっ！」
　空をなだめるように創真は真顔で言う。
「ありがとうソラ」
　空は頬を染めながら縫いぐるみを抱きしめる。
　きっと、ずっとこうしていたいと言う創真の言葉は心から思っている事なのだろう。
　空は創真が本当に大切な事を巫山戯ながら言う事を知っているからこそ、切なくてたまらなかった。
「僕は空と一緒に居られるこの時を抱き締めていたい。
　だけど、本当に大切な何かを忘れたままじゃ、やらなければいけない事から逃げたままじゃダメなんだと思う。
　だから、僕は記憶を取り戻したい。

過去にどんな悲しみがあったとしても、これから先にどんな運命が待ち受けていたとしても望む所だよ。
ソラの為ならば…、ソラと一緒ならばきっと乗り越えられるから」
創真の目が決意を秘めて強く輝く。
「ソーマお兄ちゃん…」
空は創真の気持ちが嬉しくあった。
しかし、その反面で今まで築き上げて来た大切な物が崩れてしまうような気がして不安でたまらなかった。
そして、上目遣いで創真をじっと見つめる。
「ねぇ、記憶が戻ってもお兄ちゃんはお兄ちゃんだよね…？　何処か遠くに行ったりしないよね…？」
「ふっ、そんな当たり前な事聴くなよ。僕は僕以外の何者でもないし、僕が帰ってくる所はここしか無いんだから」
まっすぐな創真の目に曇りは無い。
不安を完全にぬぐい去る事が出来なくても創真を信じる事が出来た。
空はより強く縫いぐるみを抱きしめながら言う。
「ソラはお兄ちゃんの記憶を戻すためだったら何だって協力するよ。だから、本当の本当に約束してね、何処にも行かないって…！」
「ああ、約束だよ」
朝焼けの中、少年と少女は指切りを交わす。
「お兄ちゃんと約束したんだから、ソラ頑張っちゃうよ！！」
空は先ほどまでの不安は何処にやら、満面の笑みを浮かべながらパタパタとスリッパを鳴らして小躍りする。
「ところで、本当に何だってしてくれるのかい…？」
創真がニマニマとした笑みを浮かべる。
「ま、まって！　エッチなのとかはダメだからねっ！！」
空は創真を突き放す。
「そいつは残念だ。記憶を戻す為と託けて、アレコレやってみたかったんだけどなぁ…」
「ソーマおにいちゃんのスケベっ！」
「お褒めの言葉ありがとう」
「だから、褒めていよぉ！！」
「とにかく思い立ったら吉日だ。あとでおじさんに何か方法が無いか聞いてみるとするか」

　太陽が完全に登り神戸の街が朝の喧噪に包まれる頃。
　風見鶏の館の二階にある朝食の間ではブレックファーストの準備が進んでいた。
　東側のカーブした窓からは柔らかい朝の日差しが射し込み、まるで部屋全体が光のカーテンに包まれているようだった。
　アンティークな蓄音機からはアランフェス協奏曲第一楽章と言うクラシック曲が流れ、優雅なひと時を演出している。
　館の住民である三人は小さな円卓を囲み、それぞれリラックスした様子で朝食が運ばれて来るのを待っている。
　この屋敷の主である旭陽昇は長い足を組んで、コーヒーカップ片手に二つ折りにした神戸新聞を流し読みしている。
　その場には家族しかいないと言うのにオールバックにサングラス、ワイシャツにストライプ柄のスラックスと言うお決まりの格好だ。
　露出した額には刀で斬られたような傷が見られる。
　創真と空は思春期の子供らしく四年間で大きく成長したが、昇は引き締まった体格を維持して高校生の娘がいるとは思えない程の若々しさを保っていた。
　しかし、口元に刻まれた僅かなほうれい線が、時の流れが止まってはいない事を示している。
　空は先ほどのパジャマ姿から高校の制服へと着替えていた。
　胸のポケットに国宝である八咫鏡をデザインした校章が入ったセーラー服姿だ。
　胸元を黒い紐で編み上げ、襟な白い二本のライン、袖口にタックと神戸らしいモダンな特徴が幾つも見られる。
　頭に小動物の耳のようにぴょんと立った黄色いリボンを着用し、両膝を揃えてちょっこりと座りながら朝食の到着を待つ姿は縫いぐるみのように愛らしい。
　創真は先ほどと変わらないハイネックのタンクトップ格好で、頬杖をついて部屋の入り口を眺めながらニヒルな笑みを浮かべている。
　記憶喪失である事以上に居候の身でありながら尊大な態度が謎な少年である。
　やがて、柔和な笑みを浮かべた侍女が朝食を載せた盆を持って現れる。
　足下は皮のブーツ、肌を完全に覆い隠す黒いドレスに飾り気の無い白いエプロン、前髪をアップにしフリル付きの白い帽子で後ろ髪をまとめている。
「やぁ、セイラさん。今日も美しいね」
　創真は旭陽家の侍女を努める女性…桝田聖蘭に微笑みかける。
「ありがとう御座います。創真さま」
　聖蘭は一切表情を崩さず三人の前に昼食を並べて行く。
　彼女は家事全般を一人でこなすメイド・オブ・オール・ワークとして誇りを持っている為、それが伝統的な衣装や態度として現れていた。
　まるでヴィクトリア朝のような時代錯誤な雰囲気だが、それが時を超えて現代にその姿を残す

風見鶏の館や、旭陽家の優雅な生活スタイルと見事に一致している。
「いただきます」
　この日の朝食のメインは自家製モーニングブレッド。
　あとは淡路たまごを使った半熟のスクランブルエッグ、レタスとトマトのサラダ、ソーセージであり、それが特性ケチャップと共に一枚の皿の上に添えられている。
　シンプルである故に厳選された素材や調理の巧みさ、そして盛りつけのセンスが活きている。
　そして、昇にはコーヒー、空にはミルク、創真にはオレンジジュースと各々の好みに合わせた飲み物が用意されている。
「僕は毎日セイラさんの料理が食べられて幸せさ」
　創真が微笑みかけると、聖蘭は軽く会釈し朝食の間から退室する。
「つれないなぁセイラさんは…」
「ソーマお兄ちゃんったら全く相手にされて無いんだから。
　オレンジジュースばっかり飲んでないで牛乳を飲んでみれば、ちょっとは逞しくなって相手にされるようになるかもよ」
　空は少し笑いながら言う。
「僕は牛乳は苦手なのさ。それに牛乳と発育に因果性が無いと言う事は目の前で証明されているしね」
「それってどういうことぉ！？」
「そういう事だよ。まぁ、僕はそれはそれで独自な味があって良いと思うけど」
「馬鹿にされているんだか、褒められているか解んないよぉ…」
「ふっ、全ての女性にはそれぞれの魅力があるって事だよ。そう、やがて僕の手に落ちる運命にある儚くも美しい世界に一つだけの花達なのさ…！」
「お兄ちゃんのスケベっ！」
「お褒めの言葉ありがとう」
「だから、褒めてないんだからねっ！」
「おっと、このデジャブのような感覚は一体…？　何か大切な事を忘れているような気がするんだ…。まさか、僕の失われた記憶に関係するキーワードが何処かに…！？」
「お兄ちゃん、それはさっきの記憶だよぉ…。少し前の事も忘れちゃったの！？」
「ハハハ、マサカジョウダンニキマッテイルダロ…」
「声が裏返っているよぉ…。もう、お父さんに聞くことがあるんでしょ？」
「ん？」
　朝食を終えてコーヒーを飲みながら寛いでいる昇が振り向く。
「おじさんは心理学・脳神経外科の権威として国の研究機関で働いているんだよね？」
「ああ、プロジェクトリーダーとして人の可能性を探る研究に携わっている」
「そんなおじさんからすると、ごく初歩的な質問かも知れないが教えて欲しいんだ。そう、僕の記憶を取り戻すアイディアをね」
「とうとうその時が来たか…」

　昇は聞き取れないような小さな声で呟く。
「ん？」
「いや、こっちの話だ」
　昇は咳払いをすると医者としての顔を見せて言う。
「ある地点から過去の記憶を思い出せなくなる事を逆行性健忘症と言うが、それは原因によって複数の症候に分類される。
　心理的な問題を原因とする心因性、頭部への外傷を原因とする外傷性、アルコールや薬物を原因とする薬剤性、全身疾患を原因とする症候性等である。
　創真君の場合は精密検査で異常は確認されなかった為に心因性であると考えられる。
　心因性の逆行性健忘症は心理的外傷や過度のストレスを意識から切り離そうとする、自己防衛本能によって引き起こされる解離の一種と言われる。
　その状態が慢性的に恒常化すると自分が自分であると言う感覚が失われ、まるでカプセルの中にいるような感覚を伴う」
「へぇ、それは何処かで聴いたような話だね」
「お兄ちゃん…」
　空は他人事であるかのように言う創真を心配そうに見つめる。
「その症状が悪化して日常生活に支障を来す症状を解離性障害。
　更に切り離した記憶や感情や記憶が無意識化で成長し、何らかのきっかけで自己統率権を失い、もうひとつの人格となって表面化する事を解離性同一性障害と言う。
　それは世間一般の言葉で言う所の多重人格と言うものである」
「ふふっ、記憶喪失に加えて多重人格とはありきたりな設定のオンパレードだね。まるで物語の主人公みたいだし是非ともなってみたい所だよ」
「お兄ちゃんの馬鹿っ！　記憶喪失なんて笑い事じゃないんだからねっ！！」
「ああ、空の言う通りだ。現実の解離性同一性障害は重度な障害であり、発症する前に治療する事が望ましい」
「で…、ようやく長い前説も終わり、いよいよ本題に入るわけだ。流石の僕も待ちくたびれてしまったよ」
「もう、自分から聴いといて偉そうなんだから…！」
「人に出来ない事を平然とやってのける、そこに痺れるし、憧れるだろ？」
「馬鹿…！」
「ふっ、医者の長話をご清聴戴き感謝する。
　具体的な治療法は原因となっている心理的外傷やストレス、無意識に秘めている感情を受け入れて解消する事である。
　専門の心理療法士によって催眠療法を行う方法もある。
　だが、私は覚悟を持って自らの脚で失われた記憶の道筋を辿って行くべきだと思う」
「とは言っても覚えているのは自分の名前程度さ。よく夢に見るファンタジー全開な内容はどう考えても過去の記憶とは思えないしね」

「その繰り返し見る夢こそエスと呼ばれる無意識の象徴なのだよ。
　エスとは感情、欲求、衝動、過去における経験が宿っている部分であり、人間の持つ潜在的な本能であると言っても過言では無い。
　それはエゴ…すなわち自我を通して外界に表現される事になるのだが、そのエゴとエスを繋ぐ機構をスーパーエゴと言う。
　大凡の人間にとってスーパーエゴの認識は曖昧なものであるが、それを強く認識する事で自我の進むべき方向にエスを制御出来る」
「なんだか、難しい話だね…」
「つまり、理想を持つ人は夢を操って現実へと変えて行けるって事かい？」
「その通りだ…、君は驚く程に理解が早くて助かるな。
　そして、私の研究はその先…、人間はどうすれば何処までの現実を変える事が出来るようになるか、未知とも言える領域の可能性を探る事だ。
　様々な要因が複雑に絡み合いその効果は大幅に変わるものだが、理想を持つ者は例外なくカスリマ性を発現し他者を引きつけ環境を変える力を持つ。
　すなわち、必然的に運命を引き寄せる事が臨床研究で証明されている」
「それは明白な事実だろうね、カリスマ性たっぷりの僕が言うんだから間違い無いさ」
「そう言う事は自分で言っちゃダメだよぉ！！」
「私の目から見ても創真君が特別なカリスマ性を持っていると思う。
　そんな創真君が記憶を取り戻す事が運命であり、君がそれを強く望むのならば機会は自ずと訪れるはずだ。
　その時に断片的な夢の道筋を辿って無意識を解放すれば、記憶を取り戻す事も可能だろう。
　しかし、決してそれは楽な道のりでは無いと言っておこう。
　自分自身の無意識と向き合うと言う事は、自分自身を支える自我を賭けた戦いに挑むようなものだ。
　一歩間違えば永遠に自分自身を失ってしまう事にもなりかねない。
　だが、なし得ればスーパーエゴを超える絶対的な自我を手にし、神が如く領域にまで達する事が出来るだろう。
　リスクを背負ってそれを望む覚悟はあるか？」
「ああ、僕一人じゃ成し得ないだろうが、僕には一緒に歩んでくれるソラがいるしね。きっと大丈夫さ」
「うん、ソラはお兄ちゃんの為に力を合わせてガンバルよ」
「そうか…、ならば止めはしない。
　では、私から少しばかりアドバイスをさせてもらおう。
　人は誰かに存在を認められなければ、自らの存在を認識する事が出来ない弱い存在だ。
　だが、人と人の絆、人の心と言うものは目に見えるものでは無く、言葉で伝えきれるほど単純なものでは無い。
　だから、感情の赴くまま体を重ねる事で互いを認識する事も時には必要だ」

「それって、文字通りに受け取って良いのかな？」
　創真がにやける。
「ふえっ！？」
　空は真っ赤にして驚いている。
「キスだよ。残念ながら君達の予想は外れたが、私は責任さえ負えば性的関わりも容認すべきだと思っているがね」
「それは良い事を聴いてしまったね!」
「!”#$%&’…」
　空は相変わらず顔を真っ赤にしたまま、考え込んでしまっている。
「そう、古今東西、接吻は婚姻の誓いや、親愛・敬愛・信頼の証として交わされてきた魔力のある行為だ。
　もし、自分が消えてしまいそうな時や、自分が強くあらなければならない時。
　精神的・肉体的の結びつきにより、互いの存在を認め合う事が出来たなれば、人は人として強くある事が出来るだろう。
　そういう場面に遭遇する事があったならば、思い出してみると良い」
「まぁ、今の記憶を失ってさえいなければね！」
「そうして貰えるとなによりだ。
　それはそうと、私は今日から大きなプロジェクトが実行されるので暫く帰れそうも無い。家の事は桝田君に任せるので、二人でやれることをやってみると良いだろう」

　午前八時を回る頃。
　神戸の街は通勤・通学ラッシュのピークを迎えていた。
　列を成した車が少し動いては止まる事を繰り返している幹線道路や高速道路、満員電車がひっきりなしに往来する鉄道。
　神戸の主要な交通網は街の東西を貫くように走っている。
　そこから主だった商業・工業地区に移動するには海側に南下し、住宅や学校が多い地区に移動するには山側に北上する必要がある。
　この物語に深く関わる事となる兵庫県立の高校も例外では無い。
　大阪市北区の梅田駅と神戸市中央区を東西に結ぶ阪急神戸線。
　その神戸側の終点の三宮駅から二駅目にある王子公園駅から北上し、閑静な住宅街の間を抜ける坂道を大勢の学生が列を作って歩いて行く。
　彼らは創真や空と同様のカーキ色の学生ズボンや、タックの入ったセーラー服を着用している。
　視界の先に聳える六甲山に向かってひたすら登って行く通学路は、その学校に通う学生や地元民から観音山と呼ばれていた。
　坂を登り切ると中世ヨーロッパの古城を思わせる意匠の校舎が現れる。
　世界大戦時には陸軍の司令部として使用され、敗戦後には昭和天皇も宿泊したと言う歴史があり、阪神淡路大震災をも耐え切った希少な価値のある建物である。
　そんな、学校の正面の校門前に漆黒のボディを持ったクラシックカーが乗り付ける。
　ロールス・ロイスのシルヴァークラウド・ツーと呼ばれる車である。
　五角形の格子状グリルの頂に掲げられたスピリットオブエクスタシーと呼ばれる女性像が朝日を受けて輝いている。
　普遍的な丸いヘッドライト。
　大きく盛り上がりリアに向かって流れるフェンダー。
　ポイントを押さえたメッキパーツなどが魅力であり、まるで旧家の貴族を思わせる上品さを感じる。
　運転席から旭陽家の使用人である桝田聖蘭が降り立ち、会釈をしながら後部座席のドアを開け放つ。
「やぁ、君たち待たせたね！」
　車から大地へと降り立った創真は周囲の生徒…、主に女子生徒に向けて太陽のような笑顔を浮かべて手を振る。
　創真に熱い視線を投げかけられた女子生徒はクスクスと笑ったり、キャーキャー言って喜んだり、苦笑したりと様々な反応を見せる。
「誰もお前なんか待っておらへん！」
　そんな、創真に虎柄メガホンのツッコミが飛ぶ。

　現れ出たのは背が高いツンツン頭の少年で、創真のクラスメイトである藩臣大河であった。
「やぁ、君もお迎えご苦労。もう家に帰って良いよ」
「だから、誰がお前を迎えに来る為にワザワザ学校に来る奴がおるんや！！」
「君がそうなんじゃないのか？」
「実はそうやったんやぁ！　…ってそんなワケあるかい、どアホぉ！！　それよりさっさとそこ退けや、ソラちゃん出れへんやないか！！」
「おお、そうか！　すっかり忘れていたよ！！」
　創真が退くと続いて空が車から降りる。
「もう、お兄ちゃんったらヒドイんだからっ！」
「おはよさんっ、ソラ！」
　大河の背後から現れた車の椅子に乗った女子が空と挨拶を交わす。
　透き通るような白い肌に華奢な身体、艶のある黒髪のロングヘアーが特徴的で、日本人形のような印象を見る者に抱かせる。
　大河の幼馴染みで空と同じクラスの友達である堀江夕鶴だ。
「おはよう、ユツル！　今日もお人形さんみたいにかわいい！！」
　空は夕鶴の前で腰を下ろすと、彼女の細い身体をギュッと抱き締める。
「あわわわっ、朝から何しとぉん！？　暑苦しうて辛抱たまらへんよ！！」
　そう言いながらも、頬を染めて抱き締め返す夕鶴。
「へへへっ、今日も夕鶴と抱き締め合っちゃったぁ！」
「もう、ソラは何時まで経っても子供やね」
「そんな事ないもんっ！　ソラ子供じゃないんだからね！！」
「そう言えばソラの身体から何時もと違う女っぽい匂いしとったし、まさかソーマ先輩と何かあったん？」
　夕鶴はニヤニヤしながら空に聴く。
「ふぇっ…！？　そ、そんな事ないよぉ…！！」
「明らかに動揺しとるやん！　こりゃウチの名に賭けて聞き出さなきゃアカンね！！」
「もぅ、何も無いんだからぁ！！」
「言わなきゃこうしたる…！！」
「あん、そんな所触るの止めてよぉ…！！」
　と、空と夕鶴がじゃれ合う姿を眺める創真と大河。
「ええなぁ…。なんかこう言うのってええなぁ…」
「ああ、眼福だよ…。もう色んな所がはち切れんばかりさ」
「ぶへっ、お前本当にはち切れそうになっとるで！　朝から気色悪いもん見せんといてや！！」
「ふっ、こればかりは生理現象だから仕方無いだろ？」
「ああ、こればかりはしゃーないな」
　と創真と大河は笑い合う。
「では、私はこれで失礼させて頂きます」

　友達の輪に入って行く創真と空を見届け、自分の仕事を果たした事を悟った聖蘭は会釈をして立ち去ろうとする。
「ああ、セイラさんも送り迎えご苦労様…！！」
「何時もの時間にお迎えに上がりますが、予定の変更等が御座いましたら連絡願います」
「うん、ありがとぉ！」
　聖蘭の駆るシルヴァークラウド・ツーは閑静な住宅街の中に消えて行った。
「しかしええなぁ、セイラさんってええなぁ！
　なんちゅうの、プロのメイドさんとして目立たない縁の下の存在に徹してる事で、逆にあの人の持つ美しさや力強さが際立ってる気がするんや！
　時の権力者が侍女に手を出してっちゅう話は幾らでもあるけど、その気持ち痛いほど解るで！
　反則や！！　メイドさんという存在が反則なんや！！　その圧倒的な存在は神にも近い言うても過言では無いで！！」
「ああ、解る…！！　君の言わんとする事は解るよ…！！」
「同士よ…！！」
　と創真と大河はガッチリと抱き合った。
　そんな様子を見て夕鶴が呟く。
「もう、本当にお兄ちゃんって最低ね…」
「ホンマやね…。どうして男子ってそんなにスケベなん…？　それに男同士抱き合って気色悪いにも程があるわぁ…」
　と僅かに顔を赤らめながら夕鶴が言う。
「お、お前ら…、自分の事を棚に上げてよう言うわ…。自分らだって似たようなもんやろ…！？」
「ちゃうよ！！　女子の恋話とスキンシップは純粋やの！！　男子のスケベとは全然ちゃうよ！！」
「やれやれ、また夫婦喧嘩が始まったか」
「夫婦喧嘩ちゃうねん！！」
「夫婦喧嘩ちゃうよ！！」
　大河と夕鶴は声を合わせて言う。
「その割には息ピッタリだよぉ」
　笑い合う四人の前に二人の生徒が人山を掻き分けながら姿を現す。
「神聖なる学び舎の前で下品きわまりない会話をするとは、この学校の風紀を乱す許されざる愚行であるぞ！！」
　大河よりも更に背が高くガッチリとした身体に冬用の詰襟の学生服を着用し、オールバックにした髪型に縁なしのメガネと言った威圧感溢れる男子生徒。
「うわっ、うっさいのが来よったで！！」
　そして、同じく詰襟を着用した男子だか女子だから解らない中性的な見た目の生徒だ。
「陰気なのも一緒やわ！！」

　この学校の生徒会長である小泉光一郎と、同じく副会長の新妻まことだ。
「五月蝿いぞ貴様ら！！」
　小泉は減らず口の絶えない彼らに向かって怒号をあげる。
「そうよ、二人とも、そんな事言っちゃダメよ！」
「それに旭陽よ、貴様も車通学は禁止だと何度言ったら解る！？」
「ふえっ…」
　自分が雷に撃たれるとは思っていなかった空は涙を浮かべて目を瞑る。
「ふっ、君は硬いねぇ。ひょっとして、楽しい青春を送る僕達に嫉妬しているのかい？」
　創真は小泉を揶揄うように不敵な笑みを浮かべる。
「貴様、何時からそんな腑抜けた事を抜かすようなったのだ！？
　私はこの学校を統率する生徒会長として生徒達の生活を護る為に、その身を持って風紀を正す必要があるのだ…！！」
「ふふふっ、だったら彼女はどうなんだい？」
「何？」
　創真が指差す先を見る小泉。
　それはすらっとした詰襟姿の生徒が大勢の女子生徒を引き連れながら登校している様子であった。
　しかも、ハーレムの中心となっている詰襟姿の生徒は女子であり、風に靡く長い髪を金色に染め上げ、元々の凛々しい顔立ちを更にメイクで際立たせている。
　ここまで来ると風紀の乱れどころの騒ぎでは無い。
　彼女の名は宝塚舞。
　フェンシング部の主将で女子生徒から圧倒的な人気を誇る三年生だった。
「確かに捨て置く事が出来ない問題であるっ！！　しかし、今は貴様と話をしているのだ双間っ！！」
　しかし、小泉が振り返ると、そこには創真達の姿は無かった。
「な、なんだとっ…！？」
「会長が余所見をしている間に行ってしまいました」
　副会長は感情の無い無機質な声で言う。
　そんな様子を眺めていた生徒達は生徒会長を指差してクスクスと笑う。
「何たる卑怯さ加減っ！！　おのれ双間っ！！　何時か粛清してやるっ！！」
　朝の空に生徒会長の怒号が響いた。

　一学期の期末試験が終わったこの時期。
　一般的な公立高校では教員が試験の採点を行い一部の生徒に補習を実施する…、俗に言う試験休み期間に入る。
　だが、この高校は成績不振な生徒に対する処置を午後に行い、午前中は全校生徒が外部の講師から実践的な内容を学ぶ選択式の授業が行われる事になっていた。
　この高校二年生の夏に創真と大河が選んだのはインターネットビジネスコースだ。
　インターネットを使ったサービスの現状や、その仕組み、今後どのような発展が望まれるのかと言う座学。
　それから、期間中に画像編集ソフトやHTMLの扱い方を簡易的に学び、最終的にレポートをホームページと言う形で提出するらしい。
　サービスプロバイダーや通信費が高くインターネットが一般的では無いこの時代、多くの生徒達は授業に置いて行かれないように精一杯である。
　だが、旭陽家の有り余る金を使って新しい遊びに積極的な創真と、自身の限りある金を使って将来への投資に積極的な大河にとっては初歩的で退屈極まりない授業であった。
　適当に課題を制作した後はアダルトサイトを閲覧しながら猥談に花を咲かせたり、どうやったらエロを商売に出来るか真剣に議論して有り余る時間を潰した。
　創真と大河は住んでいる環境や行動理由は大きく違うが、互いにハイテクやバイクに興味があり、エロの趣味も似ている為に妙に気が合っていた。
　授業中だと言うのに会話がエスカレートして、それを耳にした真面目な生徒が顔を顰めたり、女子生徒が赤くする場面もあった。
　通常の授業であれば厳重注意、もしくは退場となっても不思議では無いだろう。
　だが、この特別授業のコースでは一緒になった鈴木純一と言う生徒が講師を質問攻めにしていたのが隠れ蓑となり、幸いにも目を付けられる事は無かった。
　そんなこんなで午前中を使っての特別授業が終了し、創真と大河は所属するクラスの教室で終了のホームルームの時間を待っていた。
「まったく、わざわざあんな授業せーへんでも、あのレベルやったら幾らでも独学で勉強出来る思うで。それが出来ないっちゅうのは甘いんとちゃう？」
「若しくはやる気があっても何らかの事情があって出来ないか、だね。
　でもまぁ、僕らよりも看護・介護福祉コースを選んだソラやユツルの方が有意義な時間を過ごしているとは思うよ」
「せやな、ソラちゃんは医者の子やからソッチ方面に興味あるんやろうし。
　アイツかてあんな身体やから実体験として知識・経験が豊富やし、実技を除いて大活躍しとるんやろうな」
「ふっ、これからでもあっちのコースに混ぜてもらって、是非とも女子相手に実技実習したい所だよ」

「それは切実に思うわ…、ってお前またはち切れそうになっとるで…！！」
「認めたく無いものだな。自分自身の若さ故の過ちと言うものを」
「ぶふっ…！！　お前、今それ言うか…！？」
「今の僕の心情を現す的確な台詞だろ？」
「絶対にそう言う意味の台詞ちゃうやろ！！」
　そして、一頻り笑った後、大河が話を切り替える。
「そういや、ソラちゃんとユツルのクラスに東京から転校生が来たっちゅう噂やで」
「へぇ、それは女の子かい？」
「残念ながらそれが男らしいんや！
　夏休み前のこの時期に東京もんで男の転校生なんてろくなもんじゃあらへん！
　どうせ、東京の学校で虐められてたか、悪さでもして居られへんなって逃げ込んで来たに決まっとるで！
　これだから、巨人ファン…、いや、東京もんはダメなんや！！」
「それはとんでも無い偏見だね」
「ソラちゃんやユツルに手ぇ出されへん内に絞めといた方が良いんちゃう？」
「やれやれ、僕は武闘派じゃないんだけどね」
「またまたぁ、よー言うわ…、おっ！？」
　その時、大河の携帯電話が震えながら鳴り響き、表示された画面を見て彼は表情を曇らせた。
「そうか、いよい始まるんか…。しかも、始めの相手はお前とはな…」
　大河は今までとは打って変わった鋭い視線を創真に送る。
「ふっ、それはなんの事だい？」
　創真は軽くそれを受け流しながら答える。
「なんや、知らへんのか…？　まぁええわ…。今日の放課後やけど、ちょいと時間くれへん？」
　大河の声は重く緊張が感じられた。
「お尻を貸してくれとかそういうのはお断りだよ」
「アホっ！！　気持ち悪いこと言わんといてや！！　想像してしまったやないかっ！！」
　創真のジョークに大河は調子を崩されて何時もの口調に戻ってしまい、軽く咳払いをすると再び重い口調で仕切り直す。
「それとソラちゃんにも用があるから連れて来てもらえへんかな？」
「三人プレーって奴か…。良いね…、燃えるよ！！」
「夕鶴も一緒やけどね」
「よ、四人プレーかっ！！　そいつは楽しみだっ！！　是非ともイカせて…、いや行かせてもらうよ！！」
「ああああ、もうええわ…」
　創真には何を言っても無駄だと悟った大河は溜め息を付く。
「ふふっ、なんか言ったかい？」
　そんな大河の様子を横目に不敵に笑う創真。

「まぁ、そういう事やから、絶対に、忘れずに二人で来るんやで」
「ああ、待っていてくれ！！」

　創真はホームルームが終わると同時に教室を飛び出て、空を迎えに行く為に一年生の教室へと向かった。
　だが、空と夕鶴等の看護・介護福祉コースを選んだ生徒達はまだ帰って来ていないようだったので、授業が行われていると言う一誠会館と言う棟を目指す事に。
　一誠会館は一度外に出て道路を渡った所にある研修施設で、二つのホールに会議室、資料室、トレーニングルーム、合宿用の和室やシャワールームを備えている。
　班毎に用意された専用の人体模型を使う看護・介護福祉関係の実習には、ある程度の広さがあるこの施設は都合が良いのだろう。
　創真が道路を渡ろうとすると女子生徒の悲鳴が聞こえて来た。
　どうやら、一誠会館の前にある第三グランドで、空や夕鶴を初めとした看護・介護福祉コースの生徒達が、テニスウェア姿の複数の男子生徒に取り囲まれているらしい。
　第三グランドは中央に網が設置されたテニスコートで彼らのテリトリーでもあった。
　看護・介護福祉コースの生徒は女子ばかりなので、身体を鍛えた男子テニス部の集団には太刀打ちする事は出来ない。
「きゃー、やめてよぉ…！！」
　テニス部のリーダーらしき男子生徒が空の手を掴む。
「おまえら、こんな事して許されへんよ…！！」
　夕鶴が怒号を上げる。
「許されない、だと…！？　違うな、俺が許すんだ…！！　これから始まる戦いで神になれば、俺はありとあらゆる事を許す立場になるんだよっ…！！」
「こいつ、いかれとるよ…！！」
「俺が神だっ！！　この世界は俺が基準なんだよっ！！」
　その愚行を見て創真は溜め息をつく。
「やれやれ、僕は武闘派じゃないんだけどな…、まったくもって罪な奴らもいたもんだよ…！」
　創真は不敵な笑みを浮かべて彼らに向かって行こうとする。
　だが、それよりも速く一団の中でテニスウェアの男達に反抗を開始した者が居た。
　この学校の制服とは違う黒い学生ズボンと白いポロシャツを着用した小柄な男子生徒だった。
　昏い光を宿した切れ長の目、ふわふわとした短い髪、中性的な容貌が特徴的である。
　どうやら、大河が言っていた転校生と言う奴だろう。
　彼は小柄な身体を活かしたスピードで男達を翻弄し、的確に急所に攻撃を叩き込み次から次へと倒して行く。
　男性の股間を狙う際にも一切の躊躇いを持たない。
　精神・肉体共に一般人のそれとは大きくかけ離れた無機質な鋭さを感じさせた。
「ひゅう、やるものだね…！」
　創真が加勢する間も無く男達は見る見る内に数が減って行った。

だが、僅かな残党を追いつめようとする少年の背後に向けて、倒された振りをしながら起死回生の機会を狙っていた男が攻撃を仕掛けようとしていた。
「幾ら強くても後ろには気をつけないとね…！」
創真は後ろから男を昏倒させて少年を助けた。
しかし、小柄な少年は表情を変えずに、恩人とも言える創真の顔面に向けて鋭い拳を繰り出した。
「きゃあ…！！」
その場面を見ていた空から思わず悲鳴が上がる。
だが、小柄な少年の拳は創真に当たる事は無く、彼の頬を霞めると後ろから迫りつつあった残党の鼻先に突き刺さった。
「互いに、ね…」
男は噴水のように鼻血を吹き出しながら地に伏せた。
「おのれっ！！　おのれ、おのれぇっ！！！！　こうなったら、能力を使ってやるっ…！！」
最後に残ったリーダー格の男は絶叫すると、傍観していたテニス部のマネージャーらしき女子生徒を呼びつけ、突然腰に手を回して唇を重ねた。
「！？」
流石の創真も顔を顰める。
その瞬間だった。
男子テニス部と女子マネージャーを中心にして、形容し難い雰囲気のようなものが広がり空間を包み込んで行く。
言うなれば夜中に誤って墓場へと迷い込んでしまったかのような、自分がここにいるのが場違いだと感じさせる居心地の悪さであった。
そして、彼の前にNo.16『塔』のカードが出現し、それを掴み取った男は鋭い眼光を竜斗と創真へと向けた。
だが、次の瞬間。
この場を覆い尽くしていた何かが消失し、テニス部の男はドサッと言う音を立てて倒れてしまった。
白目を剝き、口からはだらしなく涎を垂らし、短パンからは黄色い液体が漏れて行く。
心配した女子マネージャーが悲鳴を上げる。
「ペナルティを受けて失格…、か…。塔のアルカナに相応しい最後だ…」
小柄な少年はテニス部が持っていたカードを奪い、その場を立ち去ろうとする。
「君は一体…！？」
創真の問いに少年は振り返らずに答える。
「僕は風間竜斗…。神の候補者…、そして罪を裁く者だ…」

戦いの始り

　正午過ぎの太陽がジリジリと照らす中、本館前の第一グランドは異様な雰囲気に包まれていた。
　Brahmo Samaj…ブラフモ・サマージと書かれた腕章を着用した多くの生徒達や、生徒会長や宝塚舞、鈴木純一と言ったクセのある生徒達が作り出す円の中。
　二組、四人の男女が向かい合っていた。
　阪神大河と堀江夕鶴。
　そして、彼らと対峙しているのは双間創真と旭陽空の二人であった。
　創真は自らの置かれた状況を把握しているのかしていないのか。
　大河からの鋭い視線や、観衆からの熱い視線を浴びせられても、何時もと変わらない不敵な笑みを浮かべていた。
　一方で創真の傍らに立つ空は身体を震わせ、周囲の歓声に怯えた声を漏らしていた。
「ふふっ、まるで僕らが主演のショーのようだね。で…、一体全体、何をすれば良いんだい？」
「こうすれば良いんや…」
　大河は車椅子の夕鶴の前に跪くと、彼女の唇に自分の舌をねじ込んだ。
「あん…」
　夕鶴の甘い息が漏れる。
「きゃっ…！！」
　それを見た空が真っ赤にした顔を恥ずかしそうに創真の腕に埋める。
「大衆の面前でラブシーンとは良い見せ物だね…！！」
「お兄ちゃんのスケベ…！！」
　大河と夕鶴の身体が重なり合うのをマジマジと見てニヤける創真の肩を空が強く叩く。
　だが、それはただの口づけ等では無かった。
　先ほどのテニス部員の時と同じように大河と夕鶴の持つ不可視の領域が広がり、観衆ごと第一グランドを覆い尽くす。
　まるで、ぎこちなさが目立つ新婚カップルの家にお呼ばれしたかのような気分だった。
　新居のあちこちに夫である大河の趣味の阪神タイガースグッズが置かれているが、それに対して嫁の夕鶴が不満を抱いている様がまざまざと思い浮かぶ。
　先ほどのテニス部員の時とはまた違った雰囲気であるが、どの道居心地が悪いのは変わりなかった。
　その何かは大河の眼前で凝縮されNo.11『力』のカードとなる。
　大河はライオンを素手で押さえ込む女性が描かれたカードを掴み取ると、背中に虎のマークが入った縦縞模様の法被へと変化させた。
　そして、法被を翻し地面を殴りつけると大きな音と共に土が弾け飛び、人間がまるまる埋まってしまう程の大穴が空いた。
「パートナーとキスを交わして内に秘めた暗示を具現化し、因果を超越した能力を発揮する…！

！　そう、それが神の候補者…、アルカナの力や！！」
「お兄ちゃん…、これって夢の…！？」
「…」
　空の問いかけに創真は考え込むように沈黙する。
「お前も神の候補者として選ばれたNo.19『太陽』のアルカナなら出来るはずやで！！　さっさとソラちゃんとキスしろや！！」
　暫くの後、創真は意を決したように空の肩を抱く。
「よし…、わかった…！！」
「ふえっ！？」
　空は顔を赤くして創真の顔を見上げるが、逆光でその表情は読み取れなかった。
　期待と不安で一杯になった空は思わず目を瞑るが、予想に反して二人の唇は重なる事は無かった。
「って事で僕らはここいらで帰るよ…！！　じゃあ、また明日…！！」
　創真が空の肩を抱いたまま立ち去ろうとする。
「って、ここに来て帰る奴が何処にいるんや！！」
「ここに居るよ…！！」
「おい、ちょい待てや！！」
　拳を振り回して追い掛ける大河から空を連れて逃げ回る創真。
　会場は笑いの渦に飲み込まれた。
「アホぉ…！！　こんな時に笑い取らんでもええやろ…！！　試合放棄はペナルティーで廃人決定なんやで…！！」
「ふむ、それは由々しき事態だね…！　こうなったらやむを得ない…か」
　創真は空と一緒に立ち止まる。
「おっ、いよいよ決心しよったか…！！」
「ソラ…、外道な真似をする僕を許して欲しいんだ…」
「お兄ちゃん…」
　空はとうとうその時が来たのかと顔を赤くして目を瞑るが、それはまたしても空振りに終わってしまう。
「行くよ…！」
　次の瞬間、創真は大河に向かって全力で駆け出し、すっかり油断し切っていた彼の股間に鋭い蹴りを放っていた。
　暫くの沈黙が訪れる。
「まったく、アホや…、どうしょうも無くアホや…！」
　その沈黙を大河の笑みが破る。
「まさかアレが効いて無いとは…、君は日々の鍛錬によって股間を強化していると言うのか…！？」
「そんなワケあるかいっ！」

「じゃあ、もう一発…！！」
　創真は再び金蹴りを放つが大河はビクともしない。
「思いを具現化する自我領域…、エゴ・フィールドに守られた俺にそんな攻撃なんて効くワケないやろっ！　片タマ痛いわ！！」
　と言って腰を叩きながらピョンピョン飛び跳ねる大河。
「ふっ、微妙に効いているじゃないか…！」
「うっさいわ…！！　そっちがその気なら、今度はこっちから行かせてもらうで…！！」
　大河が創真に向けて大きなモーションでストレートパンチを放つ。
　動体視力と反射神経に優れる創真はそれを難なくかわすが、あまりの風圧でその肌が切り裂かれた。
「これは凄い威力だね…！！」
「そやろ…！？　俺の法被は腕力を増幅するパワードスーツみたいなもんや…！！　当たったらミンチ確定やで…！！」
　創真は大河の懐に入り込んでその脇腹にブローを叩き込み、膝蹴りや肘打ち等の至近距離での反撃を警戒してすぐに離れようとする。
　だが、大河に動く気配は無かった。
　大したダメージを与えられないのは予想通りであったが、大きな隙を見せたあのタイミングで反撃が無かったのは予想外だった。
　そして、十分間合いを取った所で大河のストレートパンチが襲いかかって来たが、今度は風圧の余波を計算して無傷でかわしてみせた。
　創真は何かを悟ったように大河に向けて不敵な微笑みを浮かべる。
「だが、当たらなければどうと言う事は無いし、多少でも攻撃が効くと解れば十分やれるさ！！」
「お前、まさか…！？」
　息を飲む大河を横目に、創真は空に近寄って耳打ちをする。
「ソラ…、頼むよ…」
「お兄ちゃん…！」
　空は迷いながらも意を決したように頷き会場から離れた。
「ソラちゃん逃がすって事はホンマに生身でやる気なんやな…！！」
「ああ、その通りさ…！！」
　創真は目にも止まらぬ早さで大河の顔面にジャブを叩き込み、反射的に目を瞑ったその隙に踝にローキックを浴びせる。
　そして、そのまま背後に回り込み背中に向けて左右のジャブを連発した。
「このっ…！！」
　たまらず大河は身体を回転させ背後にいる創真に肘打ちを叩き込もうとする。
　その肘打ちは常人の攻撃力を超えてはいたが、必殺のストレートパンチのように風圧を伴う圧倒的な威力は無かった。

　創真は大河の肘打ちを左手で下から上へと押上げ、無防備になった脇腹にレバーブローを叩き込むと、そのまま前に回り込んで彼の脚を抱き込む。
　大河は創真をそのまま力まかせに蹴り飛ばそうとするが、それは適わず揚げ足を取られる形で転倒してしまう。
　大河が尻餅をついた様子を見て創真は嫌らしく笑う。
「ふっ、君の力が最大限に発揮されるのは肘を伸ばし切った時だけ。しかも、力が強化されるのは上半身のみで下半身は常人並み…、違うかい？」
「くっ、それが解ったから言うて、俺は倒せへんよ…！！」
　大河は歯ぎしりしながら立ち上がる。
「それはどうかな…？」
　創真は指を鳴らす。
「言われた通り持って来たよ、お兄ちゃん！！」
　するとそれを合図に巨大な網を持った空が会場に現れた。
「ありがとう、ソラ…！！」
　創真は空から網を受け取ると大河の周りをグルグルと回る。
「なっ！？」
　大河は突然の事に呆気にとられている間に網で簀巻きにされてしまっていた。
「な、なんやと…！？」
　大河は自らの身に起きた事を理解出来なかった。
　いや、奇想天外な創真の頭の中を理解出来る者など居ないだろう、彼自身も含めて。
「ソラには第三グランドにテニスの網を取りに行ってもらっていたのさ。テニスコートは誰も使っていない事が解っていたしね」
「確かに肘を伸ばせなければ力を活かせん事は確かや…！！　だが、時間をかければこんな網引きちぎれない事は無いで…！！」
「そうだね、でも…、こうすればどうかな…！！」
　創真は大河に渾身のタックルをかます。
　武器である腕を封じられ常人並みの足腰しか持たない大河は、創真の攻撃に抵抗する事が出来ずに成すがままに押しやられてしまう。
　次の瞬間だった。
「えっ！？」
　大河は落下していた。
　試合開始と共に自ら掘った穴へと見事に嵌り込み、その狭い空間の中で手足の自由は完全に奪われる事となったのだ。
「その状態で網を引きちぎる程の力は発揮出来るはずもないし、常人並みの脚力では穴から脱出する事も出来ないだろうね。
　あとは無防備な顔面を嬲る簡単な作業を繰り返すだけさ。
　ふふふっ、君が誇る自我領域とやらはどれ程の攻撃に耐えられるか…、今から楽しみでたまら

ないよ…！」
　創真は大河に向けて残忍な笑みを浮かべる。
「ちくしょう…！！　ちくしょーーーーーーっ！！！」
　大河は自分の末路を想像し背筋を凍らせ涙を流した。
　その瞬間、第一グランドを覆い尽くしていた大河の雰囲気…、おそらくは自我領域と呼ばれる物が消失して、彼はそのまま意識を失ってしまう。
　そして、創真が眼前に出現したNo.11『力』のカードを掴み取った瞬間、初めての戦いは終わりを告げる事となる。
　強い視線を感じた創真が激しい逆光の中に浮かぶロンドン塔の先端を見上げると、歓喜に湧く会場の様子を傍観するスーツ姿のシルエットがあった。
「…」
　しかし、サングラスに隠された表情は窺い知る事が出来なかった。

創真と空はテニス用の網で簀巻きにした大河と車椅子に乗った夕鶴を連れて、本校の北東側の山に面した科学館にあるコンピューター室にやって来ていた。

彼らから先ほどの戦いの事を聴く為だ。

そして、Project Worldと題された関係者向け専用のホームページで、具体的なルールやトーナメント表を閲覧しながら説明を受ける。

それはNo.0『道化』のブラフマンと名乗る男による計画であった。

当然の事ながら創真と空はそんな計画が着々と準備されていたなんて思いも寄らず、今の今まで超能力や戦いとは縁のない平穏無事な日常生活を過ごして来た。

大河がそれを疑問に思ったのも無理は無かった。

それはこの計画が学校に通っている全ての生徒が関与しているものであり、それぞれがブラフマンによって個別の暗示と命令が与えられて実行されていたからだ。

例えば一般的な生徒はブラフモ・サマージと呼ばれ、盲目的に戦いに熱中するギャラリーとなる事で集団催眠状態を引き起こす役割だ。

それによって一般常識と言う概念を取り除き、能力が安定して発動する場を作り出す事が出来る。

その舞台設営などの運営は小規模な力を持った小アルカナと呼ばれる暗示を受けた生徒が担当している。

そして、因果率をも覆す力を秘めたアルカナの暗示を受けた生徒がパートナーと組んで、トーナメント形式で戦い合う事で段階的に能力を開発して行く事となる。

トーナメントは創真が大河にしたように、相手の持つアルカナのカードを奪い取る事が勝利条件だ。

カードは相手の命、または意識を奪う事で出現するらしいが、何れにせよ自我領域の攻略が欠かせないだろう。

自我領域はアルカナの意識そのものなので、物理的・精神的に過大なダメージを受ける等で維持が出来なくなれば、大河のように気を失ってしまう事もある。

敗北したアルカナはその能力を発動する事が出来なくなる。

また、場合によってはテニス部員のようにペナルティーを受ける事もありうる。

例えばトーナメント以外でのアルカナ同士の戦い、逃亡等の試合放棄とみなされる行為、部外者への口外等がそれにあたる。

トーナメントはＡブロックとＢブロックに別れ、学校が休みである日曜日と第三土曜日を除き一日一戦ずつ行われる予定だ。

7月13日火曜日　Ａブロック　1-1　No.19『太陽』VS No.11『力』

7月14日水曜日　Ａブロック　1-2　No.03『女帝』VS No.17『星』

7月15日木曜日　Ａブロック　1-3　No.09『隠者』VS No.14『節制』

7月16日金曜日　Ａブロック　1-4　No.04『皇帝』VS No.01『魔術師』

7月17日土曜日　Bブロック　1-5　No.20『審判』VS No.16『塔』
7月19日月曜日　Bブロック　1-6　No.15『悪魔』VS No.12『吊された男』
7月20日火曜日　Bブロック　1-7　No.07『戦車』VS No.16『運命の輪』
7月21日水曜日　Bブロック　1-8　No.08『正義』VS No.06『恋人達』
その翌日より第二回戦の合計四戦が始まる。
7月22日木曜日　Aブロック　2-1　1-1の勝者 VS 1-2の勝者
7月23日金曜日　Aブロック　2-2　1-3の勝者 VS 1-4の勝者
7月26日月曜日　Bブロック　2-3　2-5の勝者 VS 2-6の勝者
7月27日火曜日　Bブロック　2-4　2-7の勝者 VS 2-8の勝者
次の戦いで各ブロックの勝者が決まる。
7月28日水曜日　Aブロック　3-1　2-1の勝者 VS 2-2の勝者
7月29日木曜日　Bブロック　3-2　2-3の勝者 VS 2-4の勝者
準決勝は例外的に二戦が実施される予定で、各ブロックを勝ち残った者とシード権を持つ特別なアルカナが戦う事になる。
7月30日金曜日　Aブロック　4-1　3-1の勝者 VS No.2『女教皇』
7月30日金曜日　Bブロック　4-2　3-2の勝者 VS No.5『教皇』
そして、7月31日土曜日に行われる最終決戦に勝利した者がNo.21『世界』に至り、全てを思いのままに改変する力を入れられると言う。
しかし、このトーナメント表には妙な部分があった。
到達点であるNo.21『世界』、計画を実行するNo.0『愚者』の他に、No.13『死神』が欄外に書かれている。
No.18『月』に至っては表記すらされていない…、その理由は大河や夕鶴も知らないようであった。
「でも、頭の回転が早いソーマ先輩はとにかくとして、ソラって計画の事を知らへんかったわりにはそんなに驚いてへんよね？」
一通りの説明が終わった後、夕鶴が空に抱いた感想がそれだった。
「うん…」
空は困ったように創真を上目遣いで見る。
「ふっ、僕はこの戦いと同じような夢を繰り返し見ていて、それをソラに話して聴かせていたからね」
「やっぱり、お前がNo.19『太陽』のアルカナっちゅう事で間違い無さそうやな」
大河は簀巻きにされたままで俯きながら言う。
「どう言う事だい？」
「特別な夢っちゅうのはアルカナの力の核やからな。
予知夢、悪夢、明晰夢、白昼夢、良い旅夢気分…、夢にも色々と種類があると思うんやけど、全てのアルカナは暗示でそれに特別な意味を与えられているんや」
「…」

　それが確かな話であるならば創真の苦しみの原因は人為的なものだと言える。
　空はその事にショックを受けて目を強く瞑って押し黙る。
「そんで、そんな夢を自我領域を通す事で実現しようとしたり、反対に抗おうとする事で能力が発動するっちゅうわけや」
「…」
　空にとって大河の言葉は痛いものであった。
「更に言うとトーナメントを通して行われる能力開発っちゅうのは、自我領域を完成させて無限に拡大させる事を意味しとる。
　そうすりゃ、世界そのものを個人の夢に置き換えるようになるわけやしな」
「それこそ、神の領域ってわけだ。まったく…、人間が神に等しき力を手に入れようなんて、痴がましいにも程があるね」
　創真は何時も通り平穏を装っているように見えたが、付き合いの長い彼らには密かに激昂している事が解った。
「せやね、こんな戦い負けて正解だったかも知れへんね」
　そう言う夕鶴は肩の荷が下りて何処かホッとしたような表情だった。
「俺は…、まだ諦め切れへんけど…」
　大河は奥歯を噛み締めるように言う。
「大河…」
　夕鶴はそんな彼を心配そうに見つめた。
「そう言えば君はどんな夢を見ていたんだい？」
　創真が聴く。
「そんなん決まっているやろ…！！」
「せやね…」
　強い口調で言う大河に夕鶴は切ない表情を浮かべて相づちを打った。
「そうっ、全ては阪神タイガース優勝祈願の為やぁぁぁぁぁっ！！」
　その一言でその場にいる全員が凍り付いた。
　創真なんて腹を抱えて笑っている。
　しかし、夕鶴が啜り泣いている事に気がついた空が創真の脇腹を強く叩き、ゴフッと言う咳き込む音が静寂に響いた。
「う、嘘やん…！！　お前…、うちの脚を治すためやなかったん…！？　その為に頑張ってくれたんと違うの…！？」
　そう震える声で言う夕鶴の目に涙が溢れ続ける。
　だが、そこで優しい声を掛けられる程に大河は大人では無かった。
「アホっ！！　俺がそんな事を願うわけ無いやろ！？」
　夕鶴は嗚咽しながら車椅子を走らせコンピューター室から飛び出した。
「ユツルっ！！」
　空が彼女を呼び止めようとするがその声は届かなかった。

「今直ぐ追い駆けてっ…！！」
「この格好で出来るはずも無いやろ…」
　空は大河に夕鶴を追うように促すが、彼は俯いたまま吐き捨てるように言う。
「馬鹿っ…！！」
　そして、空はその目に大粒の涙を浮かべながら眉間に皺を寄せると、簀巻きにされた大河に向かって思いっきりビンタする。
「ほんと男の子って馬鹿なんだからっ…！！」
　そう言うと空は夕鶴の後を追って教室から飛び出した。
　簀巻きにされたままの大河はジンジンと痛む頬を撫でる事も出来ない。
「君はそれで良いのかい？」
「俺は嘘は言ってへん…、ホンマの事やしな…」
「…」
　創真は腕を組んで沈黙する。
「アイツが地震で家具に押し潰されて半身不随になったのはお前も知ってるやろ…？
　始めは悲惨やったで…、ホンマ…。
　殺してくれって喚いたり…、俺や両親にあたったり…、可哀想で見てられん程やった…。
　でもな…、アイツは自分自身の力で現実を受け入れた…。
　特別な力に頼るわけでもなく一生懸命リハビリを頑張って、車椅子に乗って学校にまで通えるようになった…。
　それで経験を活かして人の助けに成りたい言うようになったんやで…。
　ホンマ凄い奴や…。
　でもな、実際に調べてみたら全身を使う実技のある資格は取れへんし、それから先の就職も難しい言うて心が折れてしまったみたいや…。
　だからと言って、神さんの力とやらで怪我を治したり就職出来る世界を作り上げたら、アイツが今まで車椅子に乗って自分の力で歩んで来た道のりを否定してまう…。
　きっと、アイツもそう思っている。
　だから、俺はアイツの心を支えて応援する為に特別な力を使おう思ったんや…」
　そう言う大河の声は震えていて泣いているようだった。
「それで、ユツルが好きだった阪神タイガースが優勝する所を見せるって事がその方法なのかい？」
　それに対して創真はあくまでクールで感情なんて微塵も感じさせない。
「そうや…、色んな逆境を乗り切って最後には優勝した1985年のヤクルト戦…。
　俺とアイツの家族でテレビで見て感動した時の事を思い出せばきっと勇気が出るって思ったんや…」
　大河は創真が何時もの調子で居てくれるからこそ、男として見せたく無い顔を見せずに済んでいた。
「ふふっ、ソラじゃないけど…、君はどうしょうも無い馬鹿だね…！　言うなれば馬鹿の王様…

、バーカー・キングの名を欲しいがままにする男だよ…！！」
　創真は吹き出しながら言う。
「な、なんやて…！？」
　大河は激昂しても簀巻きにされている為、手も脚も出ない状態だった。
「良いから落ち着けばどうだい…？」
　と創真はそんな大河の頭をポンポン叩く。
「アホぉ！！　落ち着いてられるわけ無いやろっ！！」
　大河はゆらゆらと身体を揺らす。
「ユツルはそれほど阪神タイガースに関心があるわけじゃ無いと思う…、多分だけど君の手前それを隠して生きていただけじゃないかな。
　君の自我領域とやらが拡大されて行く時に何となく感じただけで根拠は無いけどね」
「！？」
　確かに創真の思い違いであると言う可能性もあったが、大河には思い当たる節があり思わず沈黙してしまう。
「それに1985年の優勝の時。君は三歳でユツルは二歳だったはずだろ…？　彼女が覚えていたらそれこそ奇蹟さ…！！」
　大河自身もしっかり覚えているってより、後々になって両親から聴かされた話を元に、暗示の影響で記憶を作り出してしまったと言った方が正解かもしれない。
「そんな…、それやったら俺は何の為に…！？」
　大河は今まで自分が支えにしていた物を無くしてしまった気がして茫然自失となった。
「でも僕は思うんだ、僕は君の考えは素晴らしいとね…！！　ただ、あまりにも馬鹿過ぎてやり方を間違っていただけさ…！！」
　創真は褒めているんだか、馬鹿にしているんだか解らない言い方をする。
「じゃあ、どないしろって言うんや…！？」
　大河も泣いているんだか、笑っているんだかもう良く解らなくなっていた。
「確かに理学療法士、医者、看護婦、介護士なんかは難しいかも知れないよ。
　だけど、医療ってそう言う表立った資格者だけじゃなくて、もっと色んな資格者の力が必要になって来ると思うんだよ。
　さっき、授業中にインターネットで調べてみたんだけど、管理栄養士や薬剤師なんかは身体が不自由な人の特例処置みたいなのがあるみたいだよ」
「お前…、エロサイト見ながらそんなんやってたんかい…！？」
「なかなかの器用さだろ？　ウィンドウを複数起動して、データを読み込んでいる間に色々な事を検索していたのさ！！」
「せ、せやけど就職先は…？」
　そう、それが一番の問題であった。
「もしだよ…、僕が院長、空が看護婦をしている病院で一緒に働くって言ったらどうかな…？」
　青天の霹靂と言う奴だった。

「マジか…！？」
　大河は簀巻きにされたままで、手脚を喜びのあまりガクガクと震わせる。
「そこは本気と書いてマジと読む所だよ！！　僕の頭脳を持って旭陽家の家業と資産を乗っ取れば何て事はないさ！！」
「お前…」
　大河はこの時初めて創真と言う男の強さを認識し、負けて当然、いや負けて良かったとさえ思った。
　男が男に惚れるとはこう言う事だった。
「でも、その為にはまずこの戦いを勝ち抜かなければならないと思うんだ。
　神とやらが本当に世界を改変出来る力を持つかは解らないけど、何処かの誰かにそれを使われてしまったら、僕らの輝かしい未来が奪われかねないしね。
　でも、僕一人の力じゃ間違い無く成し得ない。
　ソラの力…。
　そして、タイガ…、君の力が必要だ！！
　だから、僕を助けてくれないかい…？
　人は特別な力なんかに頼らなくても、自分達の力で歩んで夢を叶える事が出来るって事を証明してやろう！！」
　大河の答えは決まっていた。

裏腹

　1999年7月14日、水曜日。
　この日も午前の選択授業の後にトーナメントが行われようとしていた。
　戦いの舞台となるのは校舎の北東にあるプールサイドだ。
　太陽の照り返しと溢れ返るギャラリー達の熱気によって、暑いと言うより痛いと言った感じだった。
　観客側の反対側のプールサイドに二組、四人の主役が向かい合っている。
　その狭い舞台に立つのは男子の制服に身を包んだフェンシング部の宝塚舞と、この場に相応しい競泳水着を着た水球部の女子生徒だ。
　彼女達のパートナーとなるのは双方共に其々の部の女子マネージャーだった。
　その為か戦いの開始前からギャラリー達は異様な盛り上りを見せていた。
　そして、戦いの開始の時を迎える。
　女性と女性。
　二組の艶かしい交わりが展開される。
　それと同時にギャラリーからは口笛や歓声が飛び交った。
「良いね…！　実に良いものを見せてもらったよ…！」
「全くやな！」
　この戦いに勝った方が創真の次の対戦相手となる。
　今後の為に敵情視察に来ていた創真と大河は、その光景をマジマジと見つめニヤけながら言う。
「男って最低やね…！！！」
「ほんと…、バカみたいね…！！！」
　少し離れた所から彼らの様子を見ていた空と夕鶴は、目と口を尖らせてあえて聞こえるような声で言う。
「…」
「…」
　それには創真と大河も沈黙するしかない。
　結局、あの後は大河と夕鶴の喧嘩のとばっちりを食らい、創真も空から距離を置かれるようになっていた。
　おかげ様で食事も通学も別々である。
　創真は送り迎えする聖蘭にこれ以上余計な手間をかけさせまいと、彼にしては珍しく電車で通学する事にした。
　その為に何時ものように創真に文句を言おうと校門に現れた生徒会長を絶句させる事が出来たのは別の話である。
　キスを終えた二人のアルカナから自我領域が広がって行く。
　そして、宝塚の元には盾と杖を持った女性が描かれたNo.3『女帝』のカードが。

　水球部員の元には水差しを持った女性の周囲に複数の星が浮かんだNo.17『星』のカードが出現する。
　宝塚はそれを鷹の紋章の刻まれた五角形の盾と、十字架と宝玉のデザインされた細身の剣へと変化させる。
　一方で水球部員は球状の物体を自分の周囲に出現させて空中に浮かべた。
「盾とサーベルは解る…、けどなんやねん、アレは…！？」
　大河はそれを見て首を傾げる。
「水球に使うボールに決まっているだろ？」
「そんなん見れば解るわボケ…！！　問題はどないな能力があるっちゃう事や…！！」
「ふっ、それは僕の優秀な頭脳を持ってしても解らないね」
　そんな水球部員の謎の能力を一番不気味に思っているのは相対する宝塚かも知れない。
　特に幅が狭くて逃げ場が殆ど無いプールサイドでは、下手に動いて隙を見せれば思わぬ不意打ちを食らいかねない。
　そんな理由からだろうか…？
　戦いは開始直後からにらみ合ったまま硬直状態になっていた。
　しかし、それは禁則事項とされている試合放棄にあたる行為とも取られかねない。
　この戦いはルールが曖昧だからこそ幾らでも想像する余地がある。
　しかし、塔のアルカナが実際に罰を受けて廃人になった事は周知の事実であり、決して楽観視出来るものでは無いと言うのが多くのアルカナの見解であった。
　歓声に包まれた観客席からは舞台に立った二人がどのような心理状況で、どのような会話を交わしているかは解らなかった。
　しかし、水球部員が自分の股間をバンバン叩いては宝塚を指差し、攻撃的な笑い声を上げて挑発しているのは確かだった。
「ふへっ…、下品にも程があるで…！！」
　対する宝塚はクールな表情と臨戦態勢を崩さず余裕すら感じる。
「一方で宝塚は女とは思えないぐらいハンサムやし、レズのタチ役ってのは女捨ててる奴らばっかりやなぁ…」
「きっと彼女達は男を知らないだけさ。あんな男勝りの子に女としての本当の悦びを教えてやるのも悪く無いと思わないかい…？」
「それは悪く無い…！　いや、むしろ大アリやな…！！」
「アホかっ…！！！　女の気持ちも解らん奴に女の悦びが教えられるはずないやろ…！！！　一度死んで生まれ変わった方が良いんちゃう…！！？」
　興奮する創真と大河を横目で見た夕鶴がまたしても聞こえる声で言う。
「もう、ユツルったら…、そんな事言っちゃダメだよぉ…！！！　だって、馬鹿は死んでも治らないって言うし死ぬだけ無駄だもん…！！！」
　てっきりフォローしてくれるのかと思いきや笑顔で止めを刺す空。
「…」

「…」
　観客席での男対女の舌戦に決着が付いたと同時に、反対側のプールサイドで行われている本当の戦いは動き出した。
　このままでは埒が明かないと宝塚は盾を構えて一気に距離を詰める。
「これで宝塚が負けで決定やな…！」
「ふっ、どこぞの漫画じゃあるまいし、それだけで決まるとは限らないだろ…？　まぁ、先に動いた方が不利な事は確かだけどね…！」
　空気を切り裂くような音と共に鋭い突きが水球部員を襲う。
　実戦とスポーツは違うかも知れない。
　だが、フェンシングによって鍛えられた宝塚の一撃は並の人間では太刀打ち出来ない領域にまで昇華されていた。
　誰もが水球部員が一撃必殺される姿を想像した。
　しかし、次の瞬間には宝塚と水球部員は何事も無かったかのように交差して互いに背中を向き合わせていた。
　水球部員は下品な笑みを浮かべる。
　そう、それは鋭い攻撃を反射的に回避したと言うより、自分に向かって歩いて来る人間を避けてすれ違ったと言った方が正解だろう。
　それだけ余裕を感じられるゆったりとした動きであった。
　それに前後して水球部員の周囲を浮遊するボールが激しく動いていたのを創真は見過ごさなかった。
　手応えを得られなかった宝塚は冷静に踵を返すと、水球部員の背中に向けて再び鋭い突きを放つ。
　またしてもボールが激しい動きを見せる。
　通常ならば完全な死角である背中を狙われて避けられる人間は居ない。
　だが、水球部員はまるで踊るかのように斜めにバックステップを踏み、そうする事が当たり前であるかのように宝塚の攻撃をかわしてしまう。
　宝塚と水球部員の視線が交差する。
　その華麗なファインプレイに会場が一段と盛り上がった。
「ふっ、聡明な僕には解ったよ、あの水球部員の能力とやらがね！」
「なんやて！？」
「きっと、あのボールは高性能なセンサーのようなものじゃないかな。
　それで、動きを分析してスローモーションのように見せたり、死角を補ったり出来ると思うのさ」
　創真の解説の正当性を証明するように水球部員は浮遊したボールを激しく動かすと、その後も宝塚の攻撃を難なくかわし続けた。
　時に余裕のある最小限の動きで、時に無駄な動きで相手を小馬鹿にしながら。
「なるほどー。でもそれって、格闘技でも無い水球部に必要な能力なんかい…？」

「ふっ、君のアホは本当に底なしだね！　君ほど説明のしがいのある奴はそうは居ないよ！！」
「なっ…！？」
　創真と大河のやり取りに耳を傾けていた空と夕鶴が思わず吹き出す。
「水球は水中で互いのゴールにボールを入れ合う競技だって言うのは知っているよね。
　でも、審判から隠れて反則まがいの力技でボールを奪い合うのが当たり前で、水中の格闘技なんて別名で呼ばれているのさ。
　ちなみに女性選手が互いの水着を掴み合ってオッパイ丸出しになりながらも、恥をかなぶり捨てて試合する光景が見られる事でも有名だったりするよ」
「それゃホンマかいな…！？」
「その様子はさながらアマゾネス同士の戦いさ。
　おそらく、水の抵抗を受けて自由に動けない為に、そんな風に荒々しいプレイにならざるを得ないんだろうね」
「だから、あの水球部員も例に漏れず攻撃的で女捨ててるんか！！　なんか、納得したでホンマ！！」
「いや、きっと彼女は表面的な態度とは裏腹に女を捨て切れないからこそ、他のプレーヤーとは違った力を望んだんじゃないかな。
　僕はそれがあの能力に現れていると思えるんだよ。
　そう、もし周囲の動きを読んで必要最低限の動きでボールを奪えたならば、反則まがいのプレイよりも遥かに有効だと思うからね」
「確かにそうやな…！！」
　大河は手を叩く。
「でも、それは全て相手のゴールにシュートを叩き込む為…、つまり攻撃に打って出る為の手段なのさ…！！」
　一方的な攻防を繰り返す内に双方の運動量には圧倒的な差が産まれていた。
　僅かに汗ばむ程度で人を小馬鹿にする表情を崩さない水球部員に対し、宝塚は滝のように汗を流し苦悶の表情を浮かべていた。
　そして、疲れがピークに達したのか宝塚は僅かに身体を硬直させた。
　その好機を逃す水球部員では無かった。
　ジャンプして空中に浮かんだボールを掴むとそのまま身体を大きく反らし、全身をバネのように使って勢い良く投球する。
　水球部員の手を離れたボールはプールの水を引き寄せながら錐揉回転する。
　例えるならば水の龍。
　大きく顎門を開いたそれは宝塚を一気に飲み込んでしまう。
　25メートルプールで、約200センチメートル幅のコースが8つ、深さが1.5メートルと仮定すると、600トンもの水量がボールと同じ勢いを持って宝塚を襲った事となる。
　幾ら自我領域を持つアルカナと言えど耐えられる物には限界がある。
　感情を持たない無慈悲な水龍が通り過ぎた時、宝塚は見るも無惨な圧死体となって現れると思

われた。
　だが、そこには五角形の盾を前方に構えた人物が立っていた。
　当然の事ながら一切の傷は無い。
　しかも、それだけでは無く乱れた呼吸を整えて、すっかり元の涼しい顔を取り戻していたのだ。
　勝利を確信していた水球部員は笑顔を引きつらせて、空中に無数のボールを出現させると次々と投げ込む。
　しかし、威力を底上げするプールの水も既に使い切ってしまっている。
　おまけに基盤となるはずの投球フォームまで乱れている為、あの凄まじい攻撃を涼しい顔で平然と乗り切った宝塚には効くはずも無かった。
　宝塚は次々と飛んで来るボールを盾で防ぎながら一歩、また一歩と競泳部員へと近づいて行く。
　その盾に触れたボールは勢いが失われ、その場に落ちては消えて行くようであった。
「どうやら、あの盾はありとあらゆるエネルギーを無効化する効果があるようだね。
　何よりも正確無比に攻撃を防ぐ動体視力と反射神経は、能力で強化した水球部員のそれを遥かに凌駕していると言えるよ」
　そして、宝塚は剣を前に突き出し、動揺を露にする水球部員に向かって突進する。
「フレッシュ！！」
　宝塚の勇ましい掛け声が響くと、剣が水球部員の左肩を貫いていた。
　自我領域によって具現化した武器による攻撃は中和される為、本物の剣で刺されたような傷や出血は無いものの、ダメージは大きく水球部員はふらつきながら一歩下がる。
　だが、宝塚もその瞬間に一歩踏み込み間合いを詰めると、今度は水球部員の右腕に剣を突き刺す。
「マルシェ・ファンデ！！」
　そして、倒れ行く水球部員に向かって飛び込むと、その額に向かって止めの一撃を放つ。
「ボンナバン・ファンデ！！」
　その瞬間、水球部員の自我領域は消失した。
　そして、気を失った水球部員から出現したNo.17『星』のカードが宝塚の手に渡り勝負が決まる。
　会場が歓喜に湧く中、大河が呟く。
「ライバルながらフェンシングで鍛えられた実力は流石やな…！！　これは強敵やで…！！」
「…」
　だが、創真はその言葉に沈黙で返した。

1999年7月15日、木曜日。

その日行われるNo.9『隠者』とNo.14『節制』の戦いの舞台は、コンピューター室や実験室のある科学館の屋上だ。

本館を始めとして趣きのある建物が多いこの高校にしては珍しく、科学館は真四角なデザインをした一般大学の研究所を思わせるコンクリート建造物だった。

屋上は山側の中央部分に四角い塔屋があり、その決して広く無い屋根面がメインスタンドとなっていた。

そこに居るのは創真、大河、生徒会長と副会長、他の一般生徒を含めて十数人程度だ。

他の生徒は本館の屋上から観戦する事となるが、昨日の戦いと比べると明らかに観客数が少なかった。

不人気なのも無理は無いだろう。

塔屋の前で対峙している本日の主役である二組は一言で言うと地味だった。

一組目は創真達とインターネットビジネスの選択授業で一緒になった鈴木純一と、彼と似た顔立ちをした妹だと思われる下級生の女子だ。

二人共誰かの使い古しだと思われるサイズの合っていない制服を着ているが、そんな見た目とは裏腹に情熱を秘めた誠実さを感じさせる。

対するは背の低いお下げ髪、瓶底メガネの科学部の女子生徒で、裾の長いセーラー服の上から大きめな白衣を着た芋臭い風貌をしている。

そのパートナーは彼女の後輩である聡明な顔付きをした男子生徒で、何故かゴミ箱を持っていた。

そして、その時を迎える。

多くは無い観客に見守られながら、鈴木純一は妹と、科学部は後輩と唇を重ねた。

「ふっ、妹とキスとは彼もやるじゃないか。背徳的でそそられるものを感じるよ」

「お前マジか…！？」

「マジもマジ、大マジだよ！」

「すまんけど、それは同意出来へんわー！！　自分とそっくりな奴とキスなんてあり得へんで…！！」

続いて何時ものように自我領域が拡大されると、それぞれの手元にアルカナの暗示を示すカードが出現した。

鈴木純一の持つNo.14『節制』のカードは、大きな翼を持つ天使が杯から杯へと水を移し替える絵が描かれている。

一方で科学部のNo.9『隠者』のカードは、ローブ姿の老人がカンテラで行く先を照らしている絵が描かれている。

そして、それがそれぞれの武器へと変化する。

鈴木純一が具現化させたものは不釣り合いな程に高級なビジネス鞄だ。

対する科学部が具現化させたのは先端にレンズが取り付けられた四角い金属製の装置で、その筐体にはDeen・Driveと言うローマ字が書かれている。
「また、武器とは思えん物が出て来おったで。しかも今回は二人共やし」
「科学部のあれはホロライトのようだね。光の指向性が強い為に科学実験にはもちろんの事、舞台でも使用される事がある照明装置だよ」
「ますます想像も付かんわ…！」
「ふっ、そうでも無いさ。少なくても科学部の方は安易に想像出来るよ。おそらく、反重力に関する事じゃないかな？」
「ホンマかいな！？」
「なんだったらランチでも賭けても良いぐらいだよ」
「だったら、お前が当たったらこの後、ビックマクドセットでも驕ったるで！」
「そいつは楽しみだね！」
そして、戦いが始ると同時に動いたのは科学部の方であった。
科学部が手にした装置のスイッチを入れ鈴木純一に向けて指向性の高い光を照射すると、彼の身体は光が射す方向に徐々に加速しながら飛ばされる。
鈴木純一は光が届かない距離まで飛ばされると床の上を転がりながら失速し、笠木と呼ばれる屋上の淵にぶつかって停止する。
彼の妹が心配そうな顔をして悲鳴を上げる。
「やっぱり、あれは反重力発生装置のようだね」
「うほっ！？　なんでや…！？　なんで解ったんや…！？」
「あのホロライトに書かれているディーン・ドライブってのは、アメリカのノーマン・Ｌ・ディーン氏が発明したと言う反重力発生装置の名称なんだよ」
「まさか、そんな装置があるなんて聴いた事が無いで…！」
「そう、客観的な検証がされていないから絵空事でしかないよ。
でも、その理論はSF愛好家のハートを鷲掴みしたみたいで、物語の中で作用反作用の法則を打ち破る宇宙船の無反動推進装置として登場する事が多いんだよ。
おそらく、彼女はそんな空想科学に少しでも近づくために科学部に入った。
そして、レンズで指向性を持たす事の出来る光のように、重力にも指向性を持たす事が出来たらって夢見たんじゃないかな？」
「それがあの能力ってワケか…！」
「そう言う事だから、約束通りビックマックセットはご馳走になるよ…！」
「くっ…！！　しゃーないか…！！」
科学部は後輩がゴミ箱から取り出した物に次々と光を照射する。
プラスチックやマッチ箱等のような軽い物から、割れたガラスや金属片のような危険度の高い物まで、様々な廃材が光の道筋に沿って加速し鈴木純一に追い打ちをかける。
「なるほど、あのゴミは遠距離用の武器ってわけやな…！！」
「直接攻撃するのは能力を持ったアルカナだけど、パートナーをその補助として使うってのは良

いアイディアだと思うね」
「しかし、ワザワザ武器としてゴミを選ぶとは、性格が拗じ曲がっているとしか言いようが無いで…！！」
「ああ、まったくだね…！」
　しかし、鈴木純一はそれらの攻撃から逃げ回りながらも、散らばったゴミを拾って手にもった綺麗な鞄の中に回収して行く。
　彼は宝塚のように優れた動体視力や反射神経を持っているわけではない。
　だが、夏の強い日差しの中では小型のホロライトの射程距離は短く、すぐに減速して落下してしまうので、十分に距離を取っていれば難しい事では無かった。
　そして、鈴木純一は鞄の中に手を突っ込むと、そこから不格好なデザインをした拳銃を取り出し科学部員に向けて引き金を引く。
　彼の妹が小さく悲鳴を上げて目を背ける。
　油断していた科学部は顔面に猛烈な一撃を食らい瓶底メガネを吹き飛ばされながら倒れるが、自我領域に守られている為に露わになった愛らしい顔に傷は無かった。
「なんや…！？　アイツは銃を具現化する能力っちゅう事か…！？」
「いや、結論付けるのはまだ早いよ…！！」
　鈴木純一は鞄の中から不格好なナイフのような物を取り出した。
「今度はナイフか…！？」
「きっと、彼は鞄に詰め込んだ物を再構築して、好きな物を作り出せる能力なんじゃないかな。でも、イメージが曖昧だからデザインが適当だけどね」
　そして、鈴木純一は意を決して一気に間合いを詰めると、倒れた科学部員に止めを刺そうとナイフを突き立てた。
　だが、次の瞬間だった。
　科学部員の可愛らしい顔が醜い笑みを浮かべたと思うと、手にしたホロライトから空に向かって閃光が迸った。
　天高く持ち上げられた鈴木純一の身体は、ゆるやかな放物線を描きながら落下し、受け身を取る事も無く頭から屋上の床面に激突した。
　いくら自我領域を持つアルカナと言えどただで済むはずが無い。
　その拍子に鞄の中に収納されていた物が床に飛び散らかる。
　科学部員はニヤニヤと笑いながら倒れた鈴木純一に向かって行く。
　もう一度、超至近距離で攻撃を浴びせて今度は屋上から落下させようと言う魂胆が、誰の目から見ても明らかであった。
　その様子に鈴木純一の妹はベタリと座り込み泣きじゃくっていた。
　そして、科学部は周囲に散乱した物を悪意を持って踏みにじると、無慈悲にホロライトを突きつけた。
　次の瞬間、人影が宙を舞った。
　だが、それは古びた制服を着た男子生徒ではなく、ぶかぶかの白衣と裾の長いセーラー服を着

た女子生徒だった。
　科学部がゴミだと思って踏みにじっていた物が一気に跳ねて、凄まじい衝撃と共に彼女の身体を下から上へと押し上げたのだ。
　それは真っ平らになるまで圧縮されていた金属のバネ、つまりは反重力装置とは比べるまでも無く単純な装置であった。
　科学部は自ら罠に嵌った事を理解する間も無く頭から落下する。
　既に拳銃によりダメージを受けていた彼女の自我領域は、落下による衝撃を耐え切る事が出来ずに消失した。
　そして、鈴木純一は気を失った科学部からNo.9『隠者』のカードを回収すると戦いの勝者となった。
　だが、彼は戦いを制したと言うのに今にも泣き出しそうな顔だった。
　鈴木純一は慌てて駆け寄って来た妹に抱き締められると我慢出来ずに嗚咽を漏らし、その場にへたり込んでしまった。
「解せぬ…、実に解せぬな…！！」
　その様子を見て生徒会長が悪態を付く。
「この世は弱肉強食、強者は弱者を護り導く責任を負わなければならないのだ…！！
　選ばれし者が力と力をぶつけ合う戦いに勝利し、責任の伴う強さを証明したと言うのに何を腑抜けているのだ…！？
　アルカナで無ければ粛清してやる所だが、仕方有るまい…！！」
　そう言うと生徒会長は塔屋から屋上に飛び降り、副会長を連れ立って建物の中に消えて行った。
　創真はその様子を見ながら呟く。
「鈴木純一か…、生徒会長の肩を持つ気は無いが不思議な男だね…」
「ああ、アイツな…、震災で働き手である父を亡くして、今も仮設住宅に住みながら奨学金で学校に通ってるんや…。
　そんで、一生懸命勉強して何時かは女手ひとつで育ててくれた母ちゃんや妹に楽をさせたいっちゅう話やで…」
「そうか…」
　創真は塔屋から飛び降り、泣いている鈴木純一に声をかける。
「君の堅実な生き方が滲み出ているような見事な戦いだったよ。
　だけど、その為に妹を悲しませてしまったのが辛いんだろ…？　僕にもその気持ちは良く解るよ…。
　互いに大切な人を守る為に本当の意味で強くなろう。こんな下らない戦いじゃない、人生って言う本当の戦いに勝てるようにね…！」

最大の脅威

　1999年7月16日、金曜日。
　昨日までの晴天が嘘であるかのような冷たい雨が降りしきる中、その日の戦いの舞台である本館前の第一グランドには傘をさした大勢のギャラリーが詰めかけていた。
「悪天候の中、アイツの戦いを見に来る奴が仰山居るなんて信じられへんな…。と言うかコイツらみんなアホちゃうか…！？」
　大河は周囲を見渡しながら言う。
「まぁ、能力を発動する前から彼に実力があるのは誰の目から見ても明らかだしね。差し詰めこの戦いの優勝候補者と言った所かな」
　創真は嘲笑しながら言う。
　彼は己の身体をストイックなまでに鍛え上げ、平和な世の中では必要の無い戦闘能力を有する事で知られていた。
「しかも、教師や一般的な生徒からは人気があるらしいしね。
　彼は鍛えた身体を『粛清』や『護る』って言葉を使って効果的にアピールする事で、上手く人心をコントロールしているんだよ。
　自分に従わない人に不安を与える一方で、支持者には絶対的な安心を与えたりとね。
　人が不安に弱い生き物だって事を彼は良く知ってるんだろうね」
「やっぱ、アホばっかやな…！！　強いもんに巻かれてれば安心やって発想自体がアホや…！！」
　大河は露骨にその人物や、彼の支持者に対して嫌悪感を露わにした。
　そう、それはこの学校の生徒会長である小泉光一郎であった。
　彼は男だか女だか解らない副会長の新妻まことを従わせ、身体を濡らす雨など意に介さない堂々とした振る舞いを見せていた。
　まさに優勝候補の名に恥じぬ貫禄である。
　対するは奇術部員で傍らにバニーガールを従えた燕尾服姿の男子生徒だった。
　そして、何時もの如く自我領域を発生させる通過儀式の後、二人のアルカナの手にカードが握られる。
　生徒会長のカードは王冠をかぶり、王笏を手にした人物が、王座に座る絵が描かれたNo.4『皇帝』のアルカナだ。
　対する奇術部のカードは様々な道具をテーブルに広げている大道芸人の絵が描かれたNo.1『魔術師』のアルカナだ。
　生徒会長は濃厚な暴力の臭いを感じさせる棍棒を、奇術師はシルクハットを其々具現化させると臨戦態勢に入った。
　先に仕掛けたのは生徒会長だった。
　棍棒を校庭に叩き付けると大地が隆起して奇術部へと襲いかかる。
　だが、奇術部は芝居めいた動きでシルクハットから剣を取り出すと華麗に振るい、発生した疾

風によって生徒会長の攻撃を相殺する。
「なんや、生徒会長は地面を、奇術部は風を操る力っちゅう事か！？」
「そう結論付けるのはまだ早いよ」
　奇術部は空中にその剣を投げて消失させると、シルクハットから取り出した杖から炎を放射する。
　生徒会長は堂々とした様子で棍棒から水の弾を飛ばして炎を打ち消した。
「今度は炎と水や…！！」
　次は二人同時の攻撃だった。
　奇術部が取り出した水瓶から飛び出した水流と、生徒会長の棍棒から発射された竜巻がぶつかり、周囲にはむせ返るような湿気が発生する。
「うおっ、水が飛び散ってサウナ状態や…！！」
　続いて奇術部が地面に向かってメンコのようにカードを投げつけると、激しい揺れと共に発生した地割れが生徒会長に迫る。
　地震にトラウマを持つ生徒達は思わず悲鳴を上げた。
　だが、生徒会長は同じく生徒達のトラウマの象徴である火球を棍棒から発射すると、ひび割れた地面を爆撃した攻撃を防いだ。
　その際に空気が乾燥して先ほどの湿気が飛んだ。
「どうやら、二人共四つの属性を使い分ける能力みたいだね」
　生徒会長が発した竜巻と、奇術部の発した炎がぶつかり合い熱風が舞う。
「二人とも互角の凄い能力やな…！！」
　その余波で汗を流した大河が言う。
　次に生徒会長の地面を隆起させる攻撃が、奇術部の放つ凄まじい水流によって冷やされ、周囲の気温が少し下がった。
「この戦いは能力が同等だからこそ、純然な戦闘力が決め手になるよ」
　そして、奇術部はシルクハットから再び剣を取り出すと、それを大げさに掲げて生徒会長を疾風で切り裂こうとする。
　だが、その大きなモーションが命取りとなった。
　生徒会長は風を纏った棍棒を力任せに振るい奇術部の風の攻撃を相殺すると、そのまま隙だらけとなった彼の頭を叩き割った。
　勝負は一撃で決まっていた。
　生徒会長はNo.1『魔術師』のカードを手に取ると、高らかに掲げて勝利を宣言した。
「状況に応じて複数の武器を取り出すって言う奇術部の能力は悪く無かったよ。
　ただ、それによって発生する強力な属性攻撃ばかりに拘って、武器そのものを使いこなせて居なかったのが大きな敗因だね」
「それ考えると生徒会長は半端ない強さやな…！」
「ああ、強力な能力と鍛え上げた肉体による高い戦闘能力。
　そして、人の持つ恐怖心を巧みに利用する支配力は、このトーナメントにおける一番の脅威

と言っても過言では無いね」

すれ違い

1999年7月17日、土曜日。
塔のアルカナが失格になっていた為、その日は戦いが行われる事は無かった。
創真と大河は何時ものインターネット・ビジネスの選択授業を終わらせると、自分達の教室で終了のホームルームが開始されるのを待っていた。
「とりあえず第二ブロックと実際やり合うのは先になるんやし、その時間も使ってそろそろ戦いの準備をした方が良いんやないか？」
「おっ、君にしては珍しくマトモな意見を言うじゃないか」
「馬鹿にせんといてや！」
「ふっ、褒めているんだよ…！！」
「それ全然褒めてへんから…！！」
大河は創真の側頭部を叩いた。
「それで、その戦いだけど殺して許されるって事は、…や、…も可能って事だよね？」
創真は小声でしれっと恐ろしい事を言う。
「どう考えてもダメやろっ！！　そもそも、能力者にそんなもんが効くとも思えんし、仮に効いたとして人としてダメやろ！！」
それを聴いた大河が顔を青くした。
「ふっ、甘いね君は。甘過ぎて思わず舐めてしまいたくなる程だよ」
「気味悪いこと言わんといてや！！」
「ここ数日間、アルカナ同士の戦いを観戦して気付いたんだけど、能力を過信してルールを勝手に解釈してしまっている事は大きな弱点と言えるよ。
僕に言わせれば人の弱点は狙う為にあるし、どんな手を使ったとして勝てば官軍さ」
「うわぁ、滅茶苦茶卑怯やな、その考え…」
「ふっ、柔軟な考えと言ってくれたまえよ。それに僕の柔軟な発想に真っ先に負けたのは何処の誰かさんかな？」
「それは言わんといて…。こう見えて俺がナイーブなんの知ってんやろ…？　夜、何時も一人で泣いてるんやで…！」
「ふっ、知ってて言ってるんだけどな。人の弱点は狙う為にあるんだからね」
創真は嘲笑する。
「卑怯過ぎて何も言われへん！」
「そう、人が弱点を捨て切る事ができない限り、僕は絶対に負ける事は無いさ！！」
「そないな事言うてると、そのうち、自分が弱点責められて痛い目見るで！」
「僕に限ってそれは無いね！　僕の弱点は敵を誘い込む為の罠だからさ！！」
「はぁ、それってどう言うことや？」
大河はキョトンとする。
「ふっ、その時が来れば分かるさ。とにかく、パートナーである空と協力しない限り先には進め

ないし、ホームルームが終わったら僕はユツルに頭を下げに行って来るよ」
「そやな…。ここ数日間、アイツらの顔見てへんかったし、そっちの方もそろそろ手を打たへんとな…」
「解っているさ、ユツルにはあの事は言わないで適当にフォローしておくよ。その代わりタイミングを見計らってちゃんと自分で伝えるんだね」
「すまへんな」

　そして、創真はホームルームが終わるなり空と夕鶴の教室へと急いで、二人を廊下へと呼び出した。
　空は夕鶴の車椅子の影に隠れている。
「悪かったね、ユツルの気持ちを考えずに笑ったりしちゃって」
　早速頭を下げる創真。
「良いんや、ソーマ先輩は事情も知らへんかったんやし。それよか、本当に許せへんのはアイツやもん…」
　夕鶴は笑いながら言う。
「彼にだって考えがあっての事だよ」
「解っとるよ…！　ただ、人の気持ちも考えないで自分勝手に突っ走って、派手に転んでも負けを認めずに笑いを取って誤摩化そうって幼稚さに愛想尽きただけや…！！」
　夕鶴はあの時を思い出して怒っているようだった。
「ふっ、それは的確だね…。だけど、タイガも反省してる事だけは確かだよ。今はまだ気持ちの整理が付かないけど、何時か彼から話があると思うよ」
「そりゃ、期待しないで待っとるよ…！！　それと、ウチよりも話さないといけない奴が居るんやないの…？」
　そう言うと夕鶴は後ろを振り返る。
「ふえっ？」
　空はきょとんとした顔をする。
「すまないね、ユツル…」
「そう言う事やからソラ…、ウチらに付き合ってソーマ先輩と仲違いするのはもう止めたってや…！！」
「うん…」
　そして、空はちょこんと愛らしい顔を出す。
「やぁ、ソラ…、こうして顔を合わすのも久々だね…」
　空はなんだか恥ずかしそうに内股を摺り合わせてモジモジしていた。
「ここ数日間、強力なライバル達の戦いを見て僕は痛感したんだ…。とても僕一人の力では勝ち進む事が出来ないってね…」
　空は昨日までの戦いを思い浮かべて胸を痛める。
　創真達から隠れて遠くから昨日までの戦いを見ていたので、それが能力を使わないで勝ち抜け

る程甘いものでは無い事は解っていた。
「だから、僕に力を貸して欲しいんだよ…！　一人では無理でも力を合わせれば、どんな事でもやり遂げられるから…！！」
　創真は空の目を真っ直ぐ見てその肩を叩く。
「お、お兄ちゃん…、それって…！！」
　彼女が創真の為に戦闘で役立てる事はそんなに多くは無い。
　確実に出来る事があるとすれば、彼の中に眠ると言うアルカナの力を目覚めさせ、自我領域を拡大させる通過儀式を行うだけだ。
　空はそれを想像して顔を真っ赤にする。
「明後日の月曜日から実際の戦闘を想定した練習や作戦を開始するつもりさ。
　でも、その前に色々と準備って奴が必要だろ？　だから、明日は街に繰り出して買い物に行こう…！！」
　その通過儀式をする心の準備の為に街に繰り出す…、つまりそれは俗に言うデートと言う奴だ。
「うん…！！　そうする…！！」
　空は創真の力になれて、しかも仲を前進させられる事に悦びを隠せなかった。
「良かったやないの、ソラ！！　ウチも羨ましいわぁ！！」
　空の恋心を知る夕鶴も応援していた。

闇に赴く

1999年7月18日、日曜日。
三宮駅の西隣である元町駅付近には南京町と言う通称で呼ばれる場所がある。
そこは中国風の意匠が施されたビルが立ち並び、日曜日と言う事もあり露店や飲食店、土産物屋に足を運ぶ沢山の人々で賑わっていた。
そう、南京町とは横浜や長崎で言う所の中華街を示す言葉である。
横浜や長崎でも戦前は南京町と言う名称を使っていたが、それが侮蔑と取られる恐れがある為に戦後になって現在の呼び名に変更された。
神戸では中国人は商売上手で裕福と言う認識があり、比較的友好な関係を関係を築けていたので、昔から馴染んだ名称を変更する事無く現在も使っている。
また、神戸と横浜は背景が似ている為に比較される事が多いが、横浜の中華街が住宅地を兼ねているのに対し、神戸の南京町は住宅地を持たない完全なる商業地域である。
更に言うと横浜中華街と比べると南京町は規模が遥かに小さい。
もっとも、神戸は横浜より総面積は大きいものの、都市部のエリアが狭く全体的にコンパクトな街の作りをしているので当たり前かも知れない。
なんと言っても街の北端である六甲山の麓にある風見鶏の館から、南端である湾岸エリア近くにある南京町までは約2km程しか無いのだ。
車だと高架線や信号に阻まれて移動に時間が掛かるので、下手すると徒歩でも変わらない程である。
だが、夏の日に歩いて坂を下って汗に塗れるのも馬鹿らしいので、創真は空と共に聖蘭に車で送ってもらって南京町までやって来ていた。
しかし、向かったのは名物である中華まんや、揚げパン、大根餅、串刺しフルーツを販売する露店では無い。
もちろん、美味しい点心や料理を出してくれる大通り沿いの有名中華料理屋でも、夜間のライトアップで有名な中央広場のあずまやでも無かった。
それは裏路地にある店先に置かれたブルースリーの全身像が印象的な土産物屋だった。
店内はカンフーで使う武器や衣装のレプリカ、はたまた風水グッズや三国志グッズ等の如何にも男性が好みそうな物が所狭しと陳列されていた。
だが、真の目的地はそこでは無かった。
中華雑貨屋にも関わらず何故か忍び装束を着用した女性店員に横目で見られながら、創真は空を引き連れて店の奥の階段室へと進む。
しかし、居室となっている二階には上がらない。
創真は周囲を見渡しながら階段下の物置に入ると、コンクリートむき出しの床面に設置された四角いマンホールを解放し、地下空間へと続くタラップを降りる。
換気ファンが回っているのにも関わらず、強い湿気とカビの臭いが充満している。
それもそのはずである。

　そこは本来であれば地下ピットと呼ばれ給排水設備が設置されていたり、湧水をまとめて排水する為の空間となっている。
　だが、改装されていかにもイリーガルな雰囲気が漂う店舗となっていた。
　当然のように扱っているものも怪しい。
　ヤモリや蛇、カエル、動物の頭部、サルの腰掛け、冬虫夏草、はたまたそれが何かすら解らない正体不明の漢方薬の材料。
　呪術や儀式に使うようなお札や祭具などの数々の道具。
　そして、ブロードソードから日本刀、青龍刀、ショットガンや拳銃、ボーガンなど古今東西を問わない武器の数々が所狭しと陳列されている。
「恐いよぉ…」
　空がそう言うのも無理は無い。
　扱われている商品の多くは普通に生きていればまず感じる事が無いような禍々しい雰囲気を放っていたからだ。
　いわゆる曰く付きと言うヤツだ。
「ねぇ、どうしてこんな所に来たの…？！」
　空はあまりの恐怖に身体を震わせて創真の腕に抱き付きながら言う。
「それは武器を買う為に決まっているだろ？」
　創真は腰に手を当てて堂々と言う。
「ふえっ、やっぱりこれって本物…！？　と言うかデートじゃ無かったの…！？」
　空は呆れ返ってずっこけた。
「ふっ、幾ら僕でもこんな所をデートスポットにするわけ無いだろ…？　いや、むしろソラを怖がらせて抱きつかせるって意味ではアリかも知れないけどね…！！」
「お兄ちゃんの馬鹿っ！！」
「お褒めの言葉ありがとう！！」
「全然褒めてないんだからね！！」
「ほら、馬鹿と天才は紙一重って言うしね！！」
　創真と空が騒いでいるとタラップを下がって先ほどの女性店員が現れた。
　彼女は特徴的な忍び装束の上からトレンチコートを羽織っていたが、空はその姿を見て驚いた顔で胸を押さえる。
「やぁ、創真君…！　久しぶりじゃないの…？」
「アヤメさんこそ相変わらず美人だね…！」
「ふふふっ、創真君も言うようになったじゃないの。でも、お姉さんとしたら、如何にも思春期丸出しの坊やだった頃の創真君の方が可愛くて好きだったなぁ」
「ふっ、男の子の中学生時代には触れるものじゃないよ」
「…」
　空が沈黙していると創真が女性店員を紹介する。
「ああ、彼女は橘アヤメさんさ。見ての通り甲賀の忍者の末裔で、いわゆる何でも屋さんをやっ

ているんだよ」
「あら、そう言う事ばらしちゃうんだ？」
「だって、全然隠す気が無いんだろ？」
「ふふふふっ、その通り！　おおっぴらにしてても信じない人は信じないしね！！　んで、その子が例の彼女？　可愛くて食べちゃいたいぐらいね！！」
　アヤメは空の全身を舐めるように見渡すと涎を拭く。
「ふぇっ…！？」
　空はアヤメに宝塚や水球部員とは違う真性のものを感じて思わず後ずさりする。
「ああ、ソラって言うんだよ。ちなみに、彼女に手を出そうって言うんだったら、アヤメさんでも容赦しないよ…！」
「あらやだ、ただの冗談なのにそんな事言っちゃって！！　冗談よ、冗談！！」
「まぁ、そういう事にしておいてあげるよ」
「それで今日はどうしたの、まさか本当にデートってわけじゃ無いでしょ？」
「ああ、幾つかの武器とソラがそれを携帯する為のホルダー、それから彼女用の防具を特注して欲しいんだ。
　それからある人物の簡易的な身辺調査を頼むよ、これは明日には必要になるから要点を絞った内容で構わない。
　詳細な仕様は紙に書いて置いたから目を通しといて欲しい」
　創真から受け取った紙を見てアヤメは頷き、空の身体をメジャーで採寸する。
「納期は7月21日か。武器とホルダーは間に合うけど、防具の方は最短で7月24日の土曜日までかかるわよ」
「じゃあ、それでお願いするよ」
「創真君用の武器、防具は良いの？」
「ああ、僕には必要無いよ」
「それと、一応確認しておくけど本当にこの内容で良いのね？　私が言うのも何だけど高いわよ」
「ああ、手持ちが無いから代金はここのアルバイトで払うよ」
「あら、それは楽しみにしているわね…！　可愛くなるまでヒィヒィ言わせてあげるわよ…！！」
「じゃよろしく…！！」
　そう言うと創真は空を連れて地下ピットを後にして賑わう中華街を並んで歩く。
「ねぇ、本当にあんな買い物して良かったの？」
　心配そうな表情を浮かべた空が創真に聴く。
「まぁ、この戦いを勝ち抜くのに必要なものだし仕方無いさ。それに武器を使うのは僕だからソラは心配しなくても良いよ」
「えっ、どう言う事…？」
「能力に偏重した攻撃方法はそれ自体が弱点になりうるから、能力者を相手にするには能力に頼

らず臨機応変に武器を切り替える戦法が有効だと思うんだよ」
「そんなぁ…、能力を使わないなんて無理だよぉ…！！　それに防具も無いんだよ…！？　攻撃を受けたら死んじゃうかもしれないんだよ…！？」
「そこでソラの協力が必要になってくるんだよ。
　大量に武器を装備すると機動力が下がってしまうので、ソラには必要に応じて武器を渡して欲しいのさ。
　自由に動けさえすれば殆どの攻撃は避けられる自信がある。
　それがどんなに強力な能力だったとしても当たらなければどうと言う事は無いしね」
　創真は自信たっぷりと言った様子だった。
「能力使えばそんな心配する必要もないのにぃ…」
　空が呟く。
「それとも、僕とキス出来ないのが残念かい…？」
「そんなんじゃないもん…！！」
「その代わりと言っちゃなんだけど、今日はこれからデートをして明日からの英気を養おう！！」
「…うん！」

成す術も無い程の敗北

　1999年7月19日、月曜日。
　本館正面にある第一グランドの南西側に武術体育館と呼ばれる建物がある。
　植林された緑で囲まれた二階建てのコンクリート建造物で、屋上部分は傾斜した屋根葺と洒落たデザインになっている。
　学校施設と言うよりも避暑地にあるホテルの附属施設と言うイメージだった。
　一階部分には剣道場や柔道場、二階にはバドミントン部や卓球部の活動の場となっている屋内運動場がある。
　午後一番の生徒の多くが何時ものようにトーナメントの観戦をする中。
　剣道場の一角に敷いた細長いシートの上で、白いスーツと喉迄を覆うヘルメットを着用した人物が一人フェンシングの練習に勤しんでいた。
　男装の女子として知られる宝塚舞だ。
　空と大河は創真の次の対戦相手である彼女の視察に来ていた。
　創真はと言うと。
「やぁ、待たせたね！！」
　何処から調達したのか宝塚と同じような白いスーツを着用し、サーブルと呼ばれる剣を持ち、左腕にヘルメットを抱えて登場した。
「だから、誰も待っとらへんわ…！！」
　大河の突っ込みが飛ぶ。
「君は確か次の対戦相手の…？」
　練習を一時中断した宝塚がヘルメットを外して振り返る。
「ああ、双間創真、帰宅部代表さ…！　よろしく…！！」
　そう言うと創真は手を差し伸べる。
「私はフェンシング部の宝塚舞だ。こちらこそよろしく頼む」
　宝塚は自創真の顔を見て少し戸惑うが、顔を赤くしながら握手に応じた。
「で、早速だけど、僕と手合わせ願いたいんだ。良いかな？」
「私は構わないが、サーブルのルールは知っているのか？」
「ふっ、昨日、徹夜で勉強して来たからバッチリさ」
「審判はどうする？」
「それなら、私が勉強したよ…、全然自信無いけど…」
　空がオドオドしながら言う。
「では良いだろう」
　創真と宝塚はピストと呼ばれる細長いシートの上に立ち、主審である空に剣と服装を検査して貰う。
「らっさんぶれ・さりゅーえ！」
　空が気を付け、礼と言う意味の言葉を発すると、創真と宝塚はピスト上で向かい合って立つ。

「あんがるど！」
　そして、構えを意味する合図で二人はマスクを着用し、ストートラインに前足のつま先を合わせて構える。
「えと・ぶ・ぷれ？」
「Oui.」
「ウィ！」
　空の準備は良いかと言う問いかけに対し、創真と宝塚が良しと答える。
「あれ！！」
　そして、その合図によって試合が開始される。
「じゃあ、僕から行かせてもらうよ…！！」
　余裕を見せる宝塚に対して創真の方から斬り掛かる。
　そして、創真は防御に徹する宝塚に対して一方的に突きを放ち続ける。
　フェンシングにはフルーレ、エペ、サーブル三つの武器に合わせたルールが存在するのだが、その内のフルーレとサーブルには攻撃権と言うものがある。
　攻撃権は先に攻撃を仕掛けた方に発生し、後手を取った者は防御に専念しなければならない。
　もし、同時にほぼ攻撃を仕掛けて突きを決めた場合をコンコルトアタックと呼び、後から攻撃した方が誤りと判断される。
　宝塚はロンペと呼ばれる動作で後ろに移動する。
　創真は前に進むマルシェによって間合いを詰めると様子を見る意味で突きを放つ。
　それを宝塚はボンナリエールと呼ばれる後ろに飛ぶ動作で難なくかわす。
「なかなか筋の良いファンデブじゃないか…！」
「こんなの小手調べさ…！！」
　宝塚の言うファンデブとは突き全般を示す言葉である。
　続けて創真は前に飛ぶボンナバンによって一気に間合いを詰める。
　フェンシングは基本的にマルシェ、ロンペ、ファンデブ、ボンナバン、ボンナリエールの基本動作を組み合わせて行う。
「フレッシュ…！！」
　そして、創真は剣を前に突き出して突進する、フレッシュと言う名の特殊な技で宝塚に追い込みをかける。
　狙うはサーブル競技で攻撃が有効となる上半身。
「鋭い踏み込みだ…。だが、遅い…！」
　しかし、創真の攻撃は難なく宝塚の剣によって払われてしまう。
　フルーレやサーブルのように攻撃権のあるルールの場合、防御側に剣を払われると権利が移動する。
　これをバラードと言う。
　動作の大きなフレッシュをバラードされて大きな隙を見せた創真に対し、リポストと呼ばれるカウンターで怒濤の反撃を開始する宝塚。

「おっと、危ない危ない…！」
　経験者で無ければ突然の攻防の交代に対応出来ずに、成す術も無くポイントを奪われてしまうだろう。
　だが、そこは創真だ。
　超人的な反射神経によって攻撃を避けながら態勢を立て直すと、宝塚の剣を払って攻撃権を取り返す。
「ほう、私のリポストに対応するだけではなく、そこからバラードするとは楽しませてくれるじゃないか…！！」
　創真の攻撃をかわしながら宝塚は笑う。
「そいつはどうも…！！」
　そして、幾度と無くバラードとリポストが繰り返され、そのスピードが徐々に速く成って行く。
「ふぇーっ、何が何だか解んないよぉ…！！」
「コイツらアホか…！？　人間じゃあらへん…！！」
　それが二人の試合を見た空と大河の感想であった。
「では、少々本気を出させて貰うとしよう…！！」
　宝塚がそう言った瞬間、空気が変わった。
「！？」
　始めに言うと創真は一切の隙を見せては居なかった。
　だが、宝塚は流れるような自然な動作で創真の剣を払うと、神速のリポストによって反撃を開始する。
　創真がその攻撃を避ける事が出来たのは奇蹟としか言いようが無かった。
　反射的に宝塚の剣を払って攻撃権を奪い返そうとする創真であったが、彼女が軌道を読んでかわしていた為に、その剣にはまるっきり手応えが無かった。
　つまり、創真は大きな隙を見せてしまったのだ。
　創真が大きく後ろに飛び緊急回避した所に宝塚の鋭い突きが襲いかかった。
　だが、宝塚の攻撃は当然その一度だけではない。
　まるで閃光のような追撃が続く。
　創真は身を捻り、後ろに下がり、間一髪の所で攻撃をかわし続けるが、ピストの端まで追い込まれてしまう。
　文字通り後の無い創真は一発逆転を狙って宝塚の剣を狙うが、その斬撃は虚空に吸い込まれるだけであった。
　しまったと思う間も無かった。
　次の瞬間、創真の胴体部分に宝塚の剣が当たっていた。
　あまりに凄まじい展開と呆気ない幕引きに放心状態となっていた空であったが、はっと我に返ると試合終了を告げる合図をする。
「あ、あっさんぶれ・さりゅーえっ！！」

双間創真、成す術も無い程の敗北であった。

「完敗やな…」
「うん…、当たらなければどうって事無いって自信満々に言ってたのに…。こんなんで本当に勝てるのかなぁ…」
　次の対戦相手である宝塚の実力を計る為にフェンシング部に乱入して見事に敗北を喫した後、創真、空、大河の三人はコンピューター室に集まっていた。
　空と大河はこの先の不安から暗い顔をしていた。
「ふっ、失敗は成功の元って言うだろ？　おかげ様で情報収集は完了したし、勝利は最早目前って感じさ！！」
　だが、当の負けた本人は意気揚々としていた。
「じゃあ聴くけど、何が解ったの…！？」
「そんなの決まっているだろ？　宝塚さんが恐ろしく強いって事さ！！」
　空が聴くと創真が自信たっぷりに即答した。
「それダメやん！！」
　大河が思わず突っ込んだ。
「やっぱり君は甘いね、それが重要だって事に気付かないなんて甘過ぎるぐらいだよ！！」
「ああ、俺が甘いのは確かやけど、舐めるのは無しの方向でお願いするで…！！」
「何言っているんだい？　誰も君のような汚い男は舐めたりしないよ！」
「こ、こいつ…！！」
「それってどういう事なの？」
　大河が青筋を立ててると空が代わりに聴く。
「ふっ、幾ら水球部が敵の動きを察知する能力を持っていたとしても、彼女が今日見たような実力を発揮していたら余裕で倒す事が出来たはずだって思わないかい？」
「手を抜いてたんとちゃうの？」
　どうせ何を言っても不正解だと大河が投げやりな感じで聴く。
「いや、あの戦いに置いて宝塚さんは本気を出していたよ。
　彼女が能力発動時に出現させる盾は絶対的な防御力を誇るものの、本来彼女が持っている実力を大きくスポイルしてしまうんだよ。
　だって、フェンシングには盾を持つなんてルールは無いだろ？」
「そっか…！！」
　空は手を叩く。
「つまり、この戦いがフェンシング同士じゃない、超能力を使った戦いである以上は勝ち目があるって事さ！！
　彼女が本気を出さない限りは確実に攻撃を避けられる事は既に実証済みだしね！！」
「でも、あの盾はどうやって攻略するんや…？　当たらなければどうと言う事は無いかも知れへんけど、それはこっちも同じ事やで…！！」

「相変わらず君はネガティブな方向にばっかり的を射た事を言うね！」
「うっさいわ、ボケ！！」
「もう、二人とも喧嘩しないでよぉ！！」
「喧嘩じゃないよ！！　こう言うのが男同士の愛情表現なのさ！！」
「ふぇっ、そうだったんだぁ！！」
「ちゃうわ！！　ソラちゃんも信じちゃダメやで！！」
「んで、君達は何時迄騒いでいるんだい？　いい加減僕の話を聴いてくれないと困るんだけどね」
「コイツ…、呆れて何も言えへん…」
「ホント…」
「ふっ、ご静聴して頂けるようで何よりだよ。
　それで、アルカナの能力ってのは願望の象徴だってのは、今までの戦いから察するに疑いようが無い事実だと思うんだ。
　じゃあ、宝塚さんのあの盾はどんな願望を現しているんだと思う？」
「えっとぉ…、自分を守りたいって事かなぁ…？」
「ご名答だよ、ソラ！」
　空が迷いながら適当に言った事に創真は手を叩いて指差す。
「ふぇっ、当たっちゃったの？」
「人の行動ってのは本当の自分を隠す為の仮面のようなものさ。
　そう、あのクールな振る舞いに男装、盾の能力も、女性としてフェンシングの選手として自信の無い自分を守りたいって気持ちの現れだと思うんだ」
「自信が無いってなんでや、あないに美人で実力もあるのに…！？」
「他人からの評価と自己評価は違うものさ。特に彼女のような高い実力を持つ努力家は得てして繊細だしね」
「そっか…、でも自分を許してあげられないなんて可哀想…」
「ふっ、ソラは良い事言うね！！
　もし、彼女が素直になって自分自身が弱い女性だって認める事が出来たら、あの大きな盾を作ってまで身を守る必要は無くなるはずだよ。
　少なくても女性のパートナーとの間に自我領域を発動出来なくなるんじゃないかな？」
「お前まさか…！？」
　大河はハッとする。
「そう、男を知らない彼女に女としての本当の悦びを教える！！　すなわち恋の罠に落とすって事さ！！」
「お兄ちゃんの馬鹿っ！！」
　空は思わず創真に向けて平手打ちを放つ。
「ふっ、当たらなければどうと言う事は無いさ！！」
　しかし、創真はいとも容易く受け止める。

「それに何でも手伝うって言った以上は協力してもらうよ！！　この作戦には自信があるんだ！！　今から楽しみでたまらないよ！！」
「もう、本当に馬鹿ね…！！」
「ああ、コイツこそ真の底抜けやな…！！」
　空と大河は腹が立つ立たないを通り越して飽きれるしか無かった。

作戦開始

1999年7月20日、火曜日。
その日は午前中の終業式が終わった後、午後からはいつも通りのトーナメント戦が行われていた。
その間も宝塚は一人武道体育館でフェンシングの練習をしていた。
創真、空、大河の三人も彼女は剣道場の入り口でこっそりその様子を観察していた。
「ねぇ、ホントにやるの…？」
空は不安を隠せない様子だった。
「ああ、もちろん…！！
男子の格好をしてようが彼女だって女の子さ…！！
大抵の女の子が怖がるもので脅かして僕が男らしく助けに入る…、名付けてヒーロー作戦は有効に決まっているだろ…！？」
創真は自信たっぷりの様子だった。
「もう、どうなっても知らんで…！！」
その鍵を握る事となる大河は溜め息をついた。
そして、宝塚が休憩の為にヘルメットを外して入り口の方に近づいたタイミングで、大河は黒光りする物体を投入して直ぐに姿を隠す。
そう、作戦の開始は開始された。
本来ならばそれは宝塚の元に一直線に飛ぶ予定であった。
だが、それは背中の甲殻を開いて飛行すると、Ｕターンして待機していた創真の頭に着地する。
「ん…？　アレは何処に行ったのかな…！？」
創真は周囲をキョロキョロ見渡すが、その所在を見つける事は出来なかった。
「お兄ちゃん頭にくっ付いているよぉ…！！」
空は声を殺して創真の頭を見る。
それは空の視線から逃れるように創真の顔面をゴソゴソと移動し、彼の鼻先にピタリと張り付いた。
「ぐわぁっ…！！　ゴキがぁ…！！　ゴキがぁーーーーっ！！」
何時もの飄々とした様子が嘘のように混乱する創真は、それを付けたまま空の方に近づく。
「やだぁ！！　来ないでよぉーーーーーっ！！」
空は思わず道場の中にまで逃げ出す。
「お願いだから取ってよっ！！！」
創真は顔面にそれを付けたまま空を追いかける。
それはもう必死だ。
「一体何をやっているんだ君達は…？」
宝塚は思わぬ乱入者達の様子を見てあきれ顔で溜め息を漏らす。

次の瞬間、それは創真の顔から飛び立った。
「あっ…！！」
空は思わず声を漏らした。
黒い物体はパタパタと羽ばたき宝塚の肩に止まったからだ。
「…」
彼女は沈黙する。
創真と空、隠れて見守る大河は彼女が悲鳴を上げる事を想像したが、宝塚は何の抵抗も無しにそれを優しく掴んだ。
「お前がここに居ると騒ぎの元になる。下手をすると殺されかねないから、ここにはもう近づかない事だな」
そう言うと彼女は窓からそれを放り投げて逃がした。
「か、かっこいい…！！」
空は目をキラキラと輝かせながら宝塚を羨望の眼差しで見つめた。
「ふっ、想像以上に漢らしいじゃないか…！！」
これには創真も感嘆の声を漏らすしかない。
「これじゃ誰がヒーローだか解らないよぉ…！！」
宝塚を救うつもりが逆に救われてしまうとは明らかな作戦の失敗だった。
「さぁ、君達も用が無いんだったら早く帰ると良い」
宝塚は呆然する創真と空に向かって不器用に微笑んだ。
その笑顔の眩しい事と言ったら無い。
「本当にありがと…！！」
「ああ、助かったよ…！！」
創真と空は手を振りながら道場を後にする。
「当然の事をしたまでだ」
そう言うと宝塚は再びヘルメットを着用して練習に戻った。
「宝塚や無いけど、ホンマにアイツら何やっとるんや…！？」
創真と空の騒ぎを客観的に見ていた大河は苦笑するしか無かった。
そんな彼らの騒ぎを聞きつけてか副会長が単独で様子を見に来ていたが、珍しく注意をしようとはしなかった。

「ふうっ、酷い目に合ったね…！！」
創真は不敵な笑みを浮かべながら言う。
「誰のせいや、誰の…！？」
「ホント…」
それに大して空と大河はあきれ顔だ。
創真、空、大河の三人はゴキブリ騒動の後、空調の効いたコンピューター室で休憩タイム、もとい作戦会議をしていた。

「じゃあ、今度は作戦の趣旨を変えてみよう！」
　創真は手を叩く。
「もしかして、不良に扮した俺が練習中の宝塚を襲って、そこを颯爽と現れたお前が助けるなんて作戦じゃ無いやろうな…？」
　大河の言葉を聴いて目を丸くする創真。
「き、君はエスパー伊藤か…！？」
「伊藤は余計やろっ！？　しかも、全然趣向変えてへんし、オチが見え切っているやないか…！？」
「ひょっとして、君が宝塚さんにやられておしまいって事かい？」
　創真はニヤニヤしながら言う。
「自分で解ってるやないかい！！」
　大河の激しい突っ込みが飛ぶ。
「良し解った！！　だったら、ゾンビに扮すれば良いんだね！！」
「何が解ったや！？　全然変わってへんやん！！　そればかりか悪化しとるやないか！！」
「じゃあ、オペレーション・ゾンビで行こう！！」
「横文字にしてもダメや！！　ああ、もうつき合ってられへんよ！！　夏休みを無駄にしたく無いから明日は協力せーへんからな！！」
　イライラの頂点に達した大河は椅子を蹴っ飛ばすとコンピューター室を後にする。
　そして、近くに居た副会長に八つ当たりするように肩をぶつけると、廊下の向こう側へと姿を消した。
　副会長は青筋を立てて、そんな彼を早足で追いかけた。
　創真はその様子を見て不敵な笑みを浮かべた。
「酷いよ、お兄ちゃん…」
　空は創真と大河の仲違いを見て胸が引き裂かれそうな思いだった。
「なんで、折角協力してくれてるタイガさんをからかったりするの…？」
　空は思わず涙を零す。
「ふっ、僕は真剣なつもりなんだけど、天才って奴は理解され無いものなのさ…！！　彼だって何時か解ってくれるよ…！！」
「馬鹿っ…！！」
　空は創真の様子が可笑しくて、ほんの少し笑いながら言う。
「ソラも明後日に備えて明日は休んで良いよ、あとの仕上げは僕一人で大丈夫だから…！！」
「うん、そうする…！！　でも、あんまり馬鹿な事しないでよね…！！」
「ああ、明日も何時も通り真剣に頑張らせてもらうよ…！！」

計画通り

1999年7月21日、水曜日。
その兵庫県立高校にも夏休みがやって来ていた。
正午過ぎからのトーナメント戦は何時も通り校内で行われる予定ではあるが、午前中は多くの生徒が自由を満喫している為に学校内は閑散としていた。
武術体育館も何時もならば部活動に励む生徒達で賑わっているのだが、今はただ一人の女子生徒が利用している限りであった。
フェンシング部の宝塚舞だ。
彼女は何時ものようにヘルメットとスーツを着込み、剣道場に敷いたピストの上で練習に打ち込んでいた。
一方の双間創真はポテトチップスとコーラを片手に、そんな彼女の様子を武術体育館の開け放たれた窓から観察中である。
今日は彼一人であった。
自らが考案した自称天才的な作戦で空と大河の反感を買ったと言う事もある。
だが、宝塚攻略の仕上げとなる今日の作戦では彼らの力を頼る事は出来ず、創真一人で実行しなければならないと言う事が一番の理由であった。
それは彼女の弱みを突いてコンプレックスを自覚させて解消する事。
そう、昨日の作戦と基本的には変わらないが、違うとすれば彼女が本当に恐れている物を使うと言う事だろう。
創真は事前にアヤメに頼んでいた身辺調査と、自らの独自理論によってそれが何かを確信していた。
当然の如くゴキブリでもゾンビでも無い。
もっと等身大でありながら彼女にとって最も遠い存在。
それは人間、特に男性を恐れる傾向を持っていると考えられた。
つまり、創真は自分自身を使って彼女に働きかけて心を開かせるつもりであった。
だが、ただ単に優しく声をかけても、逆に威圧的な態度で脅したとしても、仮面に守られた彼女の心に届く事は無いだろう。
その為に昨日までの作戦で色々と仕込んで来た。
そして、彼女には人間や男性の他にもう一つ苦手とするものがある事が解っていたので、それを上手く利用して彼女の心に入り込む切っ掛けを作るつもりだ。
予報が正しければ、今日はその機会に恵まれるはずだ。
創真は宝塚の様子を見ながらその時を待っていたが、最後まで待ってチャンスが無ければ他のプランに移行する事も止むを得ないだろう。
「しかし、本当に綺麗な動きだね」
創真がそう呟くのも無理は無い。
マルシェ、ロンペ、ファンデブ、ボンナバン、ボンナリエール。

　そして、フレッシュ。
　フェンシングの基本を丁寧に繰り返す宝塚の練習は、ひとつひとつの動きがとても滑らかで、力強くなだらかな清水の流れを思わせた。
　彼女の驚異的な反射神経はこうした日々の積み重ねの賜物なのだろう。
　人間は慣れていない動きを反射的に取ろうとしても難しく、低い速度で徹底的に身体に覚え込ませるしか無いのだから。
　創真は気がついたら宝塚の練習する姿に魅入ってしまって、暇つぶしに持ち込んでいた漫画や小説を読む機会を失っていた。
　やがて日が傾き始めた頃、急激に空が暗くなったかと思うと、低く唸るような音と共に大粒の雨が降り始めた。
　そして、一瞬全ての感覚を奪うような激しい光と、大地を揺るがすような轟音が衝撃となって伝わって来る。
　かなり近くに落雷したようだ。
「どうやら、天気予報は当たっていたみたいだね」
　創真がそう言った時だった。
「きゃーーーーーっ！！」
　女性の甲高い悲鳴が武術体育館の中から聞こえた。
　それも計画通りだ。
　創真が開け放たれた窓を飛び越え剣道場に踏み入ると、そこには頭を抱えながら蹲っている宝塚の姿があった。
「宝塚さん？」
「か、雷だけは苦手なんだ…！！　きゃっ…！！」
　流石に忍者を名乗るだけあってアヤメの調べた情報は正確だったようだ。
　しかし、雷鳴が轟く度にその身体を震わせるその姿は、普段の勇ましい姿が嘘のように弱々しく、まるで小さな子供を見ているかのような庇護欲をそそられる。
　そして、創真は作戦を開始する。
　創真は柔和に微笑むと宝塚の横に並んで、その震える肩を包み込むように優しく抱き締めた。
「な、何をっ…！？」
「男が女の子を守るのに理由なんて要らないだろ？」
　思わず身体を強ばらせる宝塚であったが、雷鳴に怯えてそれ所では無かった。
「すまない…」
　恐怖の限界に達していた宝塚であったが、藁をも掴む気持ちで創真の腕に寄りかかり身を預けると、その力強い腕の中で安心感を抱く事が出来た。
　それがどれだけ続いたのだろうか。
　創真と宝塚は窓の所に並んで夕日にかかる虹を眺めていた。
「恥ずかしい所を見せてしまったな…」
　そう言う宝塚の声は震えていた。

　宝塚は雷に怯えたばかりか、他人…、それも男性に安心感を抱いてしまった弱い自分が情けなくて仕方無かった。
「強くあろう…、そう決めたのにな…」
　彼女は溢れそうになる涙を堪える為に天を仰ぐ。
「人間はどんなに望んでも決して完璧になる事は出来はしないから、弱みの一つや二つぐらいあっても当然じゃないかな。
　僕だって意気揚々と宝塚さんにフェンシング勝負を挑んで負けているし、突然飛んで来たゴキブリから逃げ回るぐらいだしね。
　でも、僕は全然気にしてなんかいないだろ？
　それはどんな弱みがあったとしても僕は自分の事が好きだし、そんな小さな事じゃ揺るがない絶対的な自信を持っているからね」
　宝塚も創真の行動は目撃している為、その言葉は重みを持って感じられた。
「そうか…、君は羨ましいぐらいに強く生きているんだな…。
　だけど、私は自分自身に…、女である事に自信を持てないんだよ…。
　そう…、好きになった男に告白して…、女として見られないと一蹴される夢を繰り返し見る程に…」
　繰り返し見る夢。
　それが彼女のアルカナの核となる物と見て間違い無いだろう。
「それを埋めるように男のように強く振る舞って、フェンシングを頑張る私を女子達は慕ってくれたが…、結局は…」
　宝塚は何かを言いかけて口ごもる。
「いや…、止めておこう…。それを認めてしまったら、私は戦えなくなってしまうから…」
「宝塚さん…」
「互いに今日の事は忘れて、明日は全力で戦おう…」

1999年7月22日、水曜日。
この日から始まるトーナメントの第二回戦は兵庫県立高校を離れて、神戸市内にある施設を閉鎖して行われる事となっていた。
主役であるアルカナとパートナーの四名と観戦を希望する生徒は一旦学校に集合してからチャーターした数台のバスで移動する事となる。
生徒達を乗せたバスは高速道路を北に向けて走り、神戸市北区の農村地帯に作られたフルーツ・フラワーパークと呼ばれる市立の施設へと向かった。
そこには中世ヨーロッパを思わせるルネッサンス様式の建物や庭園を中心に遊園地やプール、牧場、ホテル、温泉等の施設が充実している人気スポットであった。
敷地の入口から突き当たりにあるオランダ国立美術館を模したホテルまでは、屋根付きの回廊と四季折々の花に囲まれた長細い池を有する広場になっている。
その北側にある噴水を中心にした迷宮庭園が、No.19『太陽』とNo.3『女帝』の戦う舞台であった。
すでに宝塚はパートナーであるマネージャーとの接吻を済ませて能力を発動し、能力を発動せずにサーブルを持って戦う創真相手に攻撃を仕掛けていた。
まるで創真が乱入したフェンシングの試合の再現のようだった。
だが、違うのは宝塚が能力で作り出した盾を持っている事と、幾ら彼女が本気を出したとしても創真にその攻撃が届かない事だった。
彼女がどんなに素早く動こうとも、どんなに鋭い突きを放とうとも、創真はその全ての攻撃を難なく避け続け、盾で防がれる事が前提の軽い攻撃を繰り返していた。
創真が大技を仕掛けて隙を見せない限り、宝塚は盾の絶対的な防御力を活かしてカウンターに転じる事も出来ない。
一見して互角な戦いのようにも見えるが、能力で作り出した盾と自我領域と言う二重の防御を持つ宝塚の圧倒的な有利は揺らいでいない。
しかし、宝塚は精神的には創真に押されていた。
宝塚はフェンシングの試合を通して、自分と創真の実力差を正確に把握していただけに、今のあり得ない状況に戸惑いを感じていたのだ。
彼女はそれが自分が意識していない弱点である盾による機動力の低下と、わざわざ同じ土俵に立った負け戦を利用した創真の罠であるとは思いも寄らなかった。
「何故だ…、何故私の攻撃が届かないのだっ…！？」
焦った宝塚は思わず迷いを口にする。
「それは君が仮面を付けて自分を偽っているからさ…！」
創真は不敵に口元を歪ませる。
「そ、そんな事っ…！！」
否定する宝塚であったが、動揺は大きく攻撃からは精細さが失われていた。

「そんなんじゃ、絶対的な自信を持っている僕には勝てはしない…！！」
「もうやめて…！　言わないで…！！」
　宝塚の目からは涙が溢れていた。
「本当の強さとは自分を受け入れて先に進む事だよ…。本当はもう自分で気がついているんだろ…？」
　創真の優しく静かな声で確信を突かれた宝塚は、戦意を喪失して剣と盾をだらりと垂らした。
「君が自分を取り戻す切っ掛けをあげるよ…！」
　そう言うと創真は放心した宝塚の懐に一気に踏み込みその唇を奪った。
　その戦いを見守っていた観客達は、あまりの展開に何が起きたか理解する事が出来ずに唖然としていた。
「アイツ、本当にやりおったで…！！」
「ソーマ先輩…、ホンマ最低やね…！！」
「風紀を乱す軟弱者は粛清してやる…！！」
「罪を犯す者に審判は下る…」
　そして、思い思いの、主に批判的な感想を口にする。
「お兄…、ちゃん…？」
　全身を謎の装備で固めた空が茫然自失とした表情で呟く。
　その状況を一番理解する事が出来なかったのは、双間創真と最も親しくパートナーでもある彼女だったのかも知れない。
　そして、暫くの沈黙の後に宝塚は脱力してその場に座り込むと自我領域を消失させた。
　その手に盾と杖を持った女性が描かれたNo.3『3』女帝のカードが出現する。
「そう…、私は女性である事を捨て切れないの…」
　宝塚の呟いたその言葉。
　それは昨日の夕方、宝塚が自分の弱さに直面した時に自ら言いかけた言葉だった。
　創真はそんな彼女の手を優しく包み込む。
「でも、僕はそんな女性を捨て切れない宝塚さんが素敵だと思うよ」
「ば、馬鹿な事を言わないで…！！」
　宝塚は顔を赤くしながら言う。
「本当にそう思っているから言っているんだよ。
　ゴキブリを逃がしてやる優しい心を持っていて、小さな子供のように雷で怖がる姿も可愛らしいし、フェンシングを頑張る姿は凄く綺麗だったから。
　だから、女性である自分に自信を持って、これからは女性を捨てるんじゃなくて、女性として強くなって欲しいのさ」
「そうか…、ありがとう…」
　宝塚は創真の手を握り返して、そのまま涙を流し続けた。
　そして、どれだけの時間が経っただろうか。
　宝塚は一頻り泣いて吹っ切れた後、創真に頼み事をする。

「良かったら、もう一度わたしと戦って欲しいの…！！　自分を偽った私じゃない、女としての私と…！！」
「ああ、勿論さ…！」
　創真が頷くのを確認すると、宝塚は学ランを脱ぎ捨ててパートナーである女子マネージャーと向き合う。
「厚かましいと思う…。だけど、今度は女としての私を愛して欲しいの…！」
　女子マネージャーは目をキラキラさせて宝塚に成されるがまま唇を許した。
　そして、宝塚から今迄以上に強力な自我領域が広がる。
　自我領域は宝塚の身体に合わせて強固に収束すると、その手の中にあったNo.3『女帝』のカードの絵柄を変化させた。
　それは星がデザインされた王冠を被り、宝玉の付いた杖を持った美しい女性が、緑豊かな自然の中で王座に座っている絵だった。
　その変化はマルセイユ版と呼ばれる古くから伝わるタロットカードから、ウェイト版と呼ばれる新しい解釈で描かれたタロットカードへの移行を示していた。
　当然、宝塚が具現化する能力も今迄の物とは違っていた。
　彼女の手に握られてるのは鍔の代わりにオーブの付いたサーブルのみであり、以前のように鷹の紋章の入った盾は持っていなかった。
　つまり、宝塚の実力が最も発揮されるフェンシングと同様のスタイルへと変化したのだ。
　宝塚は創真に向かって剣を剣を突き立てながら突進する。
　すると宝塚の周囲の植物が意思を持つかのように宝塚の動きに追従し、無数の槍となって一斉に創真へと襲いかかった。
　No.3『女帝』のカードは植物を司る大地母神を現していると言われている。
　その化身の如く植物を操る。
　それは女性としての自分を受け入れた宝塚に相応しい能力であった。
「ふっ、これで本気を出して戦えると言うもんだよ…！！」
「ホンマかいな…？　策に溺れて墓穴掘ったんちゃうか…！？」
　観戦していた大河は創真に対して突っ込みを入れながら、彼が瞬殺されるのを想像した。
　しかし、創真の言葉が意外にも真実であった事が証明される。
「ソラ、爆裂缶だ！！」
「うん！！」
　阿吽の呼吸で空は腰のベルトに括り付けてあった烏龍茶の缶を創真へと投げ渡す。
　そして、創真は缶の上部についた紐を引き抜くと、迫りつつある宝塚に向かって投げつけた。
　激しい爆発が宝塚を包む。
　当然のように自我領域を持つ宝塚は無事であるが、いくら能力で操られているとは言っても植物でしかない無数の槍は全て焼き払われた。
　創真は炎によって眩惑された宝塚の鳩尾に向かって蹴りを繰り出す。
「くっ…！？」

「破魔札！！」
　創真の合図に対し、空は腰の武器ホルダーから取り出したカードの束を投げ渡す。
　創真は梵字の書かれたカードを扇状に広げると、先ほどの蹴りによって間合いの空いた宝塚に向かって散蒔ける。
　派手な爆発があるわけでも無い。
　だが、それは宝塚の自我領域に触れると、青白く怪しく発行して消えて行った。
「ぐわぁーーーーーっ！！！」
　宝塚は自分の精神を直接攻撃される異質な痛みを感じ苦悶の表情を浮かべる。
　それはまるでアルカナ同士の戦いにおいて、具現化した武器や能力で自我領域に攻撃を受けたかのようなダメージであった。
「それは霊的現象を鎮めるお札を現代風にアレンジしたものさ…！　ぶっつけ本番だったけど、やっぱり自我領域にも効くようだね…！！」
「こんなもので…！！」
　再び散蒔かれたカードを宝塚は植物を操って防ごうとする。
　だが、植物とカードが接触した瞬間に青白い光が発生したと思うと、能力での支配権が失われて操作する事が出来なくなった。
　つまり、あのカードは能力攻撃を無効化出来ると考えた方が良い。
　下手に距離を取り続けるのは危険だと踏んだ宝塚は、自分の得意とするサーブルを使った近距離での戦いを仕掛ける為に間合いを詰めようとする。
「ロングメイス！！」
　空は自分の背丈程ある棒状の物体を創真へと投げ渡す。
　それは四つに分割されて空の武器ホルダーに括られていたもので、彼女は創真が必要とするだろうと思い事前に組み立てていたのだ。
　創真はロングメイスを迫りつつある宝塚に向かって横一文字に振り回す。
　宝塚は慣れていない横方向の攻撃に対応する術を持たず、ロングメイスの突端に付いた六面体を腹に食らってすっ飛ぶ。
　六面体には鉛のような重い金属が内臓されているらしく、その長さによる遠心力と相まって相当な威力を発揮していた。
　しかし、それ故に攻撃するには大きく勢いを付ける必要がある。
　その弱点を見逃す宝塚では無かった。
　攻撃を仕掛けようとする創真に生まれた隙に合わせて一気に間合いを詰め、ロングメイスの死角となる至近距離へと入り込む。
　創真の持っている近接武器はサーブルのみ。
　サーブル対サーブルの戦いであれば明らかに宝塚の方が有利である。
　あとは命に関わらない場所に剣を突き刺し、彼を動けなくすれば自分の勝ちだと宝塚は確信していた。
　だが、創真の口元が歪む。

　創真は先ほどの破魔札の残りを一枚宝塚の胸元に突きつけた。
「ぐっ…！！」
　たった一枚では範囲も威力も大した事は無いが、彼女の隙を作り出すには十分過ぎる程の効果を発揮した。
「そして、童子切安綱だ！！」
　創真はサーブルを投げ捨て空に合図を送る。
　そして、鞘に収まった日本刀を受け取って抜き放つと、刀身から自我領域にも似た不可視の何かが広がって行った。
「相手が日本刀とは言え接近戦では負けはしない…！！」
　態勢を整えた宝塚は堂々とした様子で日本刀を構える創真に向かって、サーブルを突き立てながら勇ましく突進する。
「ふっ、それはどうかな…？」
　しかし、創真は迫りつつ有る宝塚のサーブルを上に弾き、そのまま自我領域に覆われた彼女の身体を斬りつけた。
　その瞬間、先ほどの破魔札と同様の青白い光が弾けた。
　やはり、宝塚の身体には一切の傷は付いていないが、精神に直接大きなダメージを受けていた。
「ぐっ…、その刀はどうなっているの…？」
「これは源頼光が酒呑童子と言う鬼を退治したと言う逸話を持つ刀さ…！　真相の程は解らないけど強い力を持つ事は確かなようだね…！！」
　そして、創真と宝塚は互いに攻撃を繰り出し合う。
　創真の持つ刀や破魔札の威力はアルカナの能力に匹敵すると言っても過言では無い。
　だが、創真は自我領域を持っていない為、宝塚は一撃でも攻撃を当てる事が出来たら勝つ事が出来る。
　この勝負はそう言う単純な構図だった。
　しかし、 宝塚の攻撃は創真に届く事は無かった。
　自分自身を偽って守ろうとするコンプレックスを克服し、得意とするフェンシングスタイルで実力の全てを発揮したとしても。
　先日のフェンシング同士の戦いで確認された実力差は、たった数日の短期間で逆転出来るはずは無い。
　それなのに何故、創真はこんなにも強いのだろうか。
　宝塚は一心不乱に攻め込みながら考える。
　答えは単純であった。
　そう、これはフェンシング同士の戦いでは無いからだ。
　フェンシングとは狭いピストの上での縦軸の移動と突きに特化した剣術である。
　一方で創真のスタイルにはこれと言った型が無く、フェンシングの弱点である横軸を中心にした攻撃を自由自在に繰り出して来る。

　創真はスポーツであるフェンシングには慣れていないかも知れない。
　だが、宝塚以上に実戦に慣れているのだろう。
　普通の高校生であるはずの彼が一体何故そんな経験値を積んでいるのか？
　それこそ解らない。
　だが、宝塚の目の前で不敵な顔をしながら刀を振るう少年は、陽の当たる世界には相応しく無い正真正銘の怪物だと言う事は確かであった。
「そう…、本当に仮面を被っていたのは君の方だったのね…」
「ふっ、なんの事だい…？」
　創真の一撃が宝塚の自我領域を完全に消滅させる。
　そして、出現したNo.3『女帝』のカードを取り上げ、双間創真はこの戦いの勝者となった。
「…」
　そんな様子を見た旭陽空は、歓喜に沸く会場の中で一人胸を痛めていた。
　そして、謎の少年…、双間創真を巡る物語は加速して行く。

1999年7月24日、金曜日。
空は創真と共にNo.4『皇帝』とNo.14『節制』の戦いの舞台へと移動するバスに揺られていた。
その日はまるで空の気持ちを現しているかのような曇り空だった。
空は隣の席に座って窓の外の流れ行く景色を眺めている創真の横顔を盗み見るが、彼が何を感じ、何を考えているかは解らない。
こんなにも近くに。
手を伸ばせば触れる事の出来る距離に居るのにも関わらず、まるでテレビ画面の向こう側の人物であるかのように遠く感じた。
空は思わず溢れそうになる涙を必死に堪える。
思えば13日にこの戦いが始まって以降、泣きたくなる事ばかりだった。
14日の宝塚と水球部の常識離れした能力者同士の戦いを見た夜、そんな危険に挑まなければならない創真の事が心配でたまらず自室で泣き続けた。
泣き腫らした顔を見せて創真に余計な重みを背負わせたく無かったから、15日は聖蘭に無理を言って顔を合わさないで過ごした。
また泣いてしまうかも知れないから、その日の鈴木純一と科学部の戦いと、16日の生徒会長と奇術部の戦いは一緒に観戦しなかった。
戦いから逃れる事が出来ないのは仕方無いが、せめて創真と口づけを交わして自我領域を発動すれば彼を守る事が出来るんじゃないかと思った。
だから、17日に創真から仲直りを切り出され、自分の力が必要だと言われた時は嬉しくてたまらなかった。
しかし、キスをする為のデートを期待していた空が、18日に連れて来られたのは南京町にある何でも屋だった。
空はそこの店員である橘アヤメと言う女性に見覚えがあった。
以前、記憶を無くした創真が旭陽家に来たばかりの頃、不安を隠せずに荒れた生活を送っていた彼を悪の道に引きずり込もうとしていた女だった。
あの頃の創真は年下の空から見ても幼くて、あまりに可哀想な子供だっただけに、彼女の事は許し難く思っていた。
しかも、不足する代金を彼女の仕事を手伝う事で払うと言う。
空は創真があの頃に戻って取り返しの付かない道を歩もうとしているのでは無いかと心配でならなかった。
しかも、そこまでして買ったのは数種類の武器と空が使う防具だけだった。
創真は能力に頼らず戦うと滅茶苦茶な事を言うだけでは無く、攻撃なんて当たるわけが無いから自分には防具が必要無いと自信満々だった。
何時か慢心に足をすくわれる気がして不安だった。
そして、明くる19日。

実力で勝る宝塚の攻略法として創真が考えた作戦は、彼女を恋に落とす事だった。
あまりにもお馬鹿な作戦に思わず頭に来た空であったが、このまま見捨てる事も出来ないのは確かなので付き合う事にした。
それに滅茶苦茶な奔放さが創真らしくて、なんだか妙に嬉しかったのも確かだった。
だから、20日に実行されたお馬鹿な作戦は心の何処かで楽しさを感じていたし、嫌気が差した大河が離脱した後も空は最後まで彼を信じて支えるつもりだった。
21日に創真が作戦の最後の仕上げをしている間、納品された武器をスムーズに渡せるように、その特性を理解してトレーニングを繰り返した。
そして、22日にいよいよ宝塚との戦いを迎えた。
今迄の作戦が功を奏したのか、動揺して何時もの調子を発揮出来ない宝塚に止めを刺すように創真がキスをした。
自分とは絶対にしようとはしないのに。
だが、落ち込んでいる間は無かった。
本当の自分自身を取り戻した宝塚が創真に再び戦いを申し込んだのだ。
創真は本気を出して戦えると喜んでいたが、観戦していた大河は慢心から墓穴を掘ったと思ったようだった。
空は創真を助けたいが一心で、間合いから必要とされる武器を先読みし、素早く投げ渡せるように一生懸命頑張った。
その甲斐があって創真は武器を華麗に使いこなし、実力を発揮した宝塚を物ともしない圧倒的な強さを見せつけて勝利した。
創真の強さがあれば回りくどい作戦は必要無かったと思う。
ただ、本当に宝塚と正々堂々と本気を出した勝負をしたかったのかも知れない。
自由奔放に戦う創真は何時になく楽しそうであったから。
そして、本当に仮面を被っているのは創真の方だと言う宝塚の言葉を聴いて胸が痛くてたまらなかった。
あのアヤメと言う女性と同じ日陰の道。
あるいは夢に出て来ると言うゴスロリ少女と共にある戦いの中にこそ、創真の本質はあるのでは無いかと心の何処かで思い続けていたからだ。
創真の記憶喪失は無意識に感情を切り離す事によって発症していて、それを受け入れる事によって治る可能性があると言う。
もしかすると、創真が自分自身を偽って何時までも辛い思いをし続けているのは、空が彼を日常生活に無理矢理縛り付けているからなのかも知れない。
だから、創真が記憶を取り戻す為には、彼が自分と過ごす日々を捨てて本来あるべき道を歩む必要があるのだろう。
それが解っているからこそ、創真は自分とはキスをしないんだと思う。
だが、空は何処にも行かないと言う創真の言葉を最後まで信じ、二人で過ごせる時を永遠に抱き締めていたかった。

それが創真を苦しめる子供じみた我が侭な願いであったとしても。
空は隣の席で窓の外を見ながら黄昏れる創真の横顔を眺め無言で真実を問いかけた。

　生徒達を乗せたバスが海岸沿いを西に走って辿り着いた先は、長田区駒ヶ林町にあるシンプルな趣きの建物だった。
　綺麗に塗装されている為に新しい印象を受けるが、元々は公会堂として大正13年に建てられた建物で現在は保育所として利用されている。
　本日の戦いの主役であるNo.4『皇帝』の生徒会長の小泉光一郎と副会長の新妻まことのペア、No.14『節制』の鈴木純一と妹のペアは建物南側にある園庭で対峙している。
　空や創真を始めとした観客はその様子を敷地の外から眺めている。
　建物の中や屋上にもかなりの観客が居るようだ。
　舞台となる園庭は藤棚の他に鉄棒やジャングルジム等の遊具が設置されている為、能力者同士の常識離れした戦闘を行うには狭い印象であった。
　つまり、障害物の使い方や間合いの取り方が勝負を左右するのだろう。
　そして、いよいよ戦いが開始される時を迎える。
　生徒会長は何時ものように副会長との通過儀式を終え、出現したNo.4『皇帝』のカードを棍棒へと変化させた。
　一方で鈴木純一はブルブルと身体を震わせて佇んでいた。
　彼の妹がその顔を心配そうに眺めている。
「どうした、早くしないか！？」
　そう言う生徒会長は苛ついているようであった。
　鈴木純一は決意をしたように拳を強く握りしめ生徒会長を睨みつける。
「僕は…、僕は戦わない…！！」
　そして、彼は高らかにそう宣言した。
「ここまで来て怖じ気付いたか、この腑抜けが！！」
「確かに戦うのは恐いけど、それだけじゃない…！　僕達がここで戦えばこの保育所を…、子供達の大切な日常を壊してしまう…！！」
「ふっ、何を言い出すかと思えばあまりにも下らんな！！
　この実験は公的な認可を受けて保障の予算も確保されている為、万が一破損したとしても新しく立て替えられる事になろう！！
　それこそ、震災で被害を受けたこの街が復興して生まれ変わったようにだ！！」
「それでも、失われた日々は二度と戻って来ないんだ…！！」
「そんな些細な感傷の為にこの戦いを放棄すると言うのか…！？　貴様にも叶えなければならない望みがあるはずだ…！！」
「でも、それは人を傷つけて妹を悲しませてまで戦う事なんかじゃない…！！　大切な人と過ごす日常の中で自分に出来る事を一生懸命頑張る事だったんだ…！！」
　鈴木純一は再度拳を握りしめて力強く言う。
「僕が犯してしまった罪は変わらないが、これ以上は罪を重ねたくないんだ…！！　だから、僕

はもう戦わない…！！」
「ならば、罰を受けるが良い…！！」
　生徒会長が鈴木純一の試合放棄を認めた瞬間だった。
　鈴木純一は雷に打たれたように自我を失い、体中から体液を垂れ流しながら力無く崩れた。
　そう、戦いの初日にルール違反でペナルティーを受けたテニス部員のように。
「この愚か者がっ…！」
　出現したNo.9『隠者』とNo.14『節制』のカードを生徒会長は拾い上げ、廃人のようになった鈴木純一に大声を上げて泣きすがる彼の妹を見ながら呟いた。
「人にはそれぞれ与えられた役割と言うものがあるのだ…！！
　平穏を謳歌するのは力持つ者の規律に従う弱者に与えられし権利である…！！
　力を持つ者は日々の中で腑抜ける事は決して許されず、弱者を護り導く責任を負い朽ち果てるまで戦い続けなければならない…！！
　自らの役割を誤り責任を放棄する輩は粛清されて当然であろう…！！」
　鈴木純一が尊い日常生活や妹を大切に思い、人を傷つける戦いを間違いであると言い切ったのは素晴らしい事だと空は思った。
　だが、生徒会長の言う通り彼は道を間違えてしまったのだろう。
　彼が戦いを放棄する道を選んでしまった事が間違いであったのか、そもそも戦いの道を選んでしまった事が間違いであったのかは解らない。
　何れにせよ彼は自分自身と妹を不幸にしてしまった事は確かだった。
　空は自分が創真の進むべき道を狂わせ不幸にしていると言う自覚があるだけに、目の前にいる兄妹が他人事に思えなかった。
　やはり、創真の事を思えば、彼を解放すべきなのかも知れない。
　別れるのは辛いし永遠と続く孤独な生活は心を引裂くだろうが、それが我が侭で彼を苦しめ続けた自分への罰であると空は思った。
　しかし。
「ふっ、僕に言わせれば本当の愚か者は君の方だよ！」
　創真は何時ものように不敵な笑みを浮かべて生徒会長に強い言葉を吐く。
「何っ！？」
「確かに彼は妹を泣かしてしまったかもしれない。
　だけど、決して周囲の状況に流されずに何が大切かを自分自身の頭で考え、自分の人生を自分自身で決められる勇気のある人だった。
　そう、自分の人生は他の誰でもない自分自身の物なんだよ。
　それなのに、何処の誰が決めたか解らない型にハマって生きるのは、思考停止しているよっぽどの馬鹿野郎だと言わざるを得ないね！」
　創真は生徒会長に強い視線を送りながらも、何処かでその様子を見ているであろう人物を意識しながら言う。
「貴様っ、それは責任を負うべき力を持つ者が言う言葉か…！？

　かつて記憶を失ったばかりの貴様はその空虚を補って余るばかりの力を持って、私が支配する中学の生徒会に戦いを挑んで来たではないか…！？
　敵ではあったが力に殉じる貴様には一目を置いていたものだ…！！
　それなのに何だ…！？
　今の貴様は力持つ者としてあるまじき平穏を謳歌するばかりか、規律を無視して風紀を乱し、あらゆる責任から背を向けて逃げ続ける腑抜けではないか…！？」
「そうやって力に溺れ続ける君には解るまい！！　本当の強さとは大切なものを守りながら自分自身の人生を楽しむ事なのさ！！」
　創真の言葉は一切のブレを感じさせない程に力強かった。
「お兄ちゃん…！！」
　空は不安を吹き飛ばす創真の言葉が嬉しくてたまらなかった。
「ならば、貴様を腑抜けにした原因を排除する事で粛清するまでだ…！！」
　生徒会長は強く拳を握りしめながら血走った目で空を睨みつける。
「ふぇ…！？」
　創真は怯える空を庇うように彼女の前に踊り出る。
「もし、僕の大切なものに手を出そうと言うのならば、僕の持つ本当の強さを見せつけてやるまでさ！！」

あとがき

　この作品を読んで頂きありがとう御座います。
　現在鋭意執筆中の「Soma x Soma 審判」ですが、初代の「Soma x Soma」の後に設定やシナリオを考え、途中まで書いたものの長い間放置していた作品です。
　その理由はシナリオの都合上どうしても切り捨てられてしまったり、悲劇的な結末を迎えるキャラクターが多い比較的ドライな作風に起因しています。
　この作品に取り込む内にそんなキャラクター達…、特に自分が大好きなあのヒロインにスポットライトを当てて救済したいと言う思いが高まり、何も考えずに理想を追い求めた作品を作り始めてしまいました。
　それが前作「Soma x Soma 真」になります。
　回り道をしなければ辿り着けない場所を目指した前作をやり切った事で、今作では自分の持ち味であるエッジの効いた作風に専念する事が出来るようになったと思います。
　まだまだ書き始めたばかりで完結までは時間を要すると思いますが、是非最後までお楽しみ下さい。

奥付

Soma x Soma 審判

http://p.booklog.jp/book/74647

著者：ゆうすけ
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/yusuke-e256/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/74647

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/74647

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ